
COBALT-SERIES
聖石の使徒
前田珠子
揺籃の瞳
集英社

COBALT-SERIES

聖石の使徒

揺籃（ようらん）の瞳

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

聖石の使徒

揺籃(ようらん)の瞳

前田珠子

集英社

目　次

聖石の使徒
揺籃（ようらん）の瞳
揺籃（ようらん）の瞳……7
晴嵐姫（せいらんき）……129
あとがき……187



聖石の使徒■登場人物紹介

トリノアーク
紅玉の使徒。矢車菊の色の瞳と褐色の肌を持つ青年。



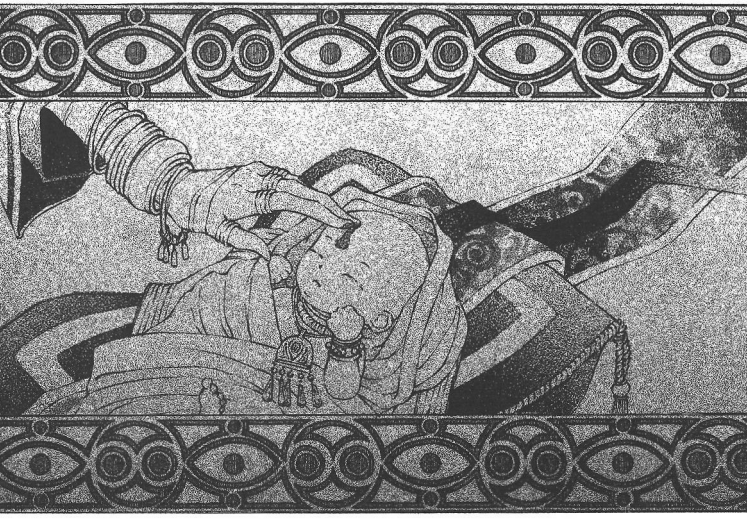


ナウルニール
青玉の使徒。純白の髪と鳩の血色の瞳を持つ青年。

イイオーン
翼飛国から派遣された、王女の護衛。

イラスト／山本鳥尾

揺籃（ようらん）の瞳



プロローグ

予言がなされた。
生まれ落ちた子供の運命として。
パルムローリ神殿の巫女は、時空を司る女神の僕たる言葉を紡ぐ。
『其はこの地にあっては災いを呼び寄せる者。
されど、望まれし地にあっては福音をもたらす者。
其はこの地に長く住まう者にあらず。
去りてこそ、意味をなすであろう』
複雑にして理解するに往々にして苦労させられる神託にしては珍しく、かなり単純なものだった。

この子供は、この地に留まれば災いの種となり、この地を離れれば、そこで祝福の声を受ける。

神託を受けた子供の両親は、耐えがたいとばかりに両手で顔を覆った。

無理からぬことだった。その子供は神々の祝福を受けて生まれてきたとしか思えぬ奇跡の具現者だったのだ。

だが、パルムローリ神殿の巫女の神託に間違いがあろうはずがない。

赤子の父親は、早速その赤子を育てるための環境を整えた。

この地にあっては、と巫女は告げた。なら、ここではない場所でなら、災いの種とならずにすむはずと、そう考えたのだ。

断腸の思いで、赤子の両親は子供を国外へと送り、信用できる配下に教育をまかせた。

そして、時は流れ、流れて――。

十六年の後、運命が動いた。

北方より武勇で知られる翼飛の民が、紫蘭国へと迫ったのだ。

文治国家として名高かった紫蘭は、しかし安寧に狎れた国家の常として、武に優れているとは言い難い状況にあった。戦闘に長けた翼飛の相手となるはずもなく、半月とかからず、紫蘭の王都は翼飛軍によって包囲された。

そうして、決定的な勝利を目前にしながら、なぜか王都に攻め入ろうとはしない翼飛から、紫蘭の王のもとへ和平の申し出がされたのは、包囲二十日後のことだった。

内容はいたって簡単なものだった。

和平の証として、翼飛は紫蘭の王女――エーメンティアを求めたのだ、翼飛王太子ナストリードの花嫁として。

紫蘭国内でもその生存を知る者は稀である王女を求められたことに、王宮は動揺し、しかし応じるしかない事態の前に屈伏した。

かくして予言の王女エーメンティアは、十六歳にして初めて祖国の土を踏むこととなった。祖国を滅亡から救うために――そして同時に、翼飛に類いなき繁栄をもたらすために。

立ちこめる暗雲ゆえに、大地は震えていたのだけれど――。

一

本日二度目の襲撃だった。

「まったく、どこのどいつらだか知らないが、しつこいというか懲りないというか……」

うんざりした響きを隠そうともせず、舌打ちまじりに毒づくイイオーンのそばで、血しぶきが上がる。

はっとして目をやれば、つきあいは浅いながら、腕の方は信頼できると確認済みの青年の姿があった。

「よお、セイ！　相変わらずいい腕だな！」

純粋にその腕前を褒めただけだったのだが、相手はにこりともしない。

「余裕ぶる暇があるならさっさと片づけろ！　姫がまた御不調を訴えられたらどうする」

苦虫をかみつぶしたような顔で説教しながら、『セイ』と呼ばれた青年は、それでも次々と襲撃者たちの動きを止めつづける。

致命傷ではない、だが戦闘能力を確実に奪うその戦い方に共感を覚えることはできないイイオーンではあったが、その伎倆には一目おいている。

だからといって、決して賛同はできないのだが。

（なーにが、『御不調』なんだか。あの姫君がこの程度の騒ぎでどうにかなるタマかよ）

翼飛から派遣された護衛団の一員として、紫蘭の隠された予言の王女を一目目にした瞬間に受けた、強烈な印象が忘れられないイイオーンは、そんなことを思う。

が、すぐに別のことを思い出し、セイの言葉に従うべく動いた。

襲撃者たちが狙う馬車のなかには、紫蘭の王女だけではなく、その身の回りを世話するためについてきた侍女たちがいるからだ。

当の姫君が危険にさらされたりしようものなら、彼女たちの身も危うい。
そう思うと、放ってはおけない気になってしまう。
『女性は守るべきもの――』
という、母親の教えがしみついているだけなのかもしれないが。
(だが、まあ、あの『姫様』とやらだけは、女の範疇から外れてるよな)
初めて目にしたときの、王女エーメンティアに感じた印象を反芻しながら、イイオーンは剣を揮う。
(あれは……決して女の目、じゃあない)
なにかが飛んでくるのを反射的に避けたイイオーンは、それが最後の襲撃者の血であることに気づき、軽く目を瞠った。
血にまみれた剣を手に、襲撃者を地に転がした男――セイは、食い入るような目で馬車を見つめていた。
(物好き……)
その一語に尽きるとイイオーンは思う。

しかし口出しはしない。するほどに親しくないというのが主な理由だが、その眼差しにこめられた想いや熱を、否定し冷却するだけの力が自分にはないとわかっているからだ。

本当に物好きだとは思うものの——あんな女などに心奪われる心境が理解できないとは……思うものの、だ。

（まあ、たで食う虫も好き好きという言葉もあることだし……）

当人が聞けば、無心ではいられまい、ずいぶん失礼なことを考えながら、イイオーンは剣の血を振るい落とした。

吹き抜ける風が血臭を払ってくれるのが唯一の救いといえば言えたかもしれない。

野営のために選ばれた場所で、男たちのうめき声があがるのは、もはや日常となってしまっている。

その元凶はたったひとりの少女だったりする。

傷口に薬草をあてがい、包帯で巻いた腕を、少女は容赦なくたたき、「はい、次！」とやる。

このときの痛みがあるものだから、彼女の的確な治療に素直に感謝する男たちは少なかったりする。

とはいえその知識は信頼できるものだから、『物好き』と呼ばれる者も出現する。物好きでなくとも、相手の力量を認めれば、信を置く者も出てくるというもの。

さんざんっぱら、屈強な戦士である男たちにうめき声を上げさせている強者の名はカートーン……王女エーメンティアのそばに従う侍女のひとりである。

「泣き言言わない！　みんな覚悟の上のことでしょう!?　そんなつもりじゃなかっただなんて、それこそ甘えた言い訳にしか聞こえないわよ！　はい、さっさと並ぶ！　もちろん重傷者が先だけどね！」

パンパンと、手を打ち鳴らしながら怪我人を従えていたカートーンは、その場に現れた意外な顔に、きょとんとした。

「イイオーン……？　あなた、怪我なんて……して、ないわよね？」

「どこに目をつけてる。おれが怪我なんかしてるように見えるか!?　治療が必要なのは、こいつのほうだ！　傷口から疫神でも入りこんだのか、ひどい苦しみようだ！　なんとか……なるか？」

問われた少女は、途方に暮れた顔になった。

「疫神が入りこんだとなると、ここにある薬だけじゃ……」

すでに土気色に変わった男の顔に目をやり、数瞬迷うように半眼を伏せた後、カートーンは背後を振り返った。

「……ちょっと、時間をもらえる？　傷口を洗ってこの薬草を揉んで当てるぐらいなら、あなたにもできるでしょ？」

そう言うと、彼女はイイオーンの返事も聞かず、馬車の方へと歩きだした。

「お、おい？」

「すぐ、戻るから！」

振り向きもせずに言い置き、歩き去る少女の様子に、イイオーンは首をひねった。

「……なんなんだ？」

「姫君に薬湯を譲ってもらいに行ったんだろう」

思いがけぬ『答え』にギョッとして振り向くと、イイオーン同様無傷の赤毛の青年が立っていた。

「姫君に薬湯を……？　なにか特別な薬草でも持ってるってのか、あのお姫さんは」

だったらけちけちせず、カートーンにでも預けてくれりゃあ面倒がなかろうに――と、どうしても『姫君』に好意を抱けないイイオーンがつぶやくと、セイの双眸に一瞬、剣呑な光が走った。

が、すぐにそれは消える。たいした自制心だと言えるかもしれない。

「薬草じゃない。それに侍女たちに預けたところで薬湯にできる代物じゃないからな、必要になる都度、姫君にお頼みするしかないんだ」

なにやら物騒である。

しかも意味が全然わからない。イイオーンは思わず顔を顰めた。

「お前、言葉が足りないとかよく言われないか？」

この護衛団に雇われて初めて出会ったわけだから、まだまだつきあいは浅い。

とはいえ、セイが無口なことは疑いようがない。が、無口というだけならイイオーンとてほかに知らないわけではない。無口でも気のいいやつはいくらだっているのだ。

だが、このセイという青年についてだけはよくわからない。勘の良さには自信のあるイイオーンにとって、ここまで印象を固められない相手は初めてだった。

腕は申し分ない。はた迷惑で凶悪な性格の主というわけでもない。

だが、わかるのはそこまでだ。どうしても、それ以上のことが摑めない。

（確か、こいつだけ、なんだよな。お姫さんに以前から仕えてたってやつは……）

だからこその、あの思い入れなのだろうか。

などなどと思っていたときのこと、セイがぼそりとつぶやいた。

「お前がなにも知らないだけだ」

聞き捨てならない言葉に、「なんだと!?」と食ってかかったイイオーンに、赤毛の青年は厭味としか思えぬため息とともに、こう説明した。

「姫君は聖石の子供でいらっしゃる。聖石の子供石を用いた薬湯は、姫君ご本人でな

ければ作れないんだ。翼飛は自国の正妃(せいひ)に迎えようとする相手のこともろくに調べていないのか？」

むっかー、ときた。

「上の方はともかく、おれみたいな下っぱがそこまで事情に通じてるもんかよ。だいたい紫蘭に年頃の王女がいたってことだって、この仕事について初めて知ったんだぜ？　聞けば正妃から生まれたただひとりの王女だってのに、なんでわざわざ国外でなんか育てたのかって疑問は、例の予言とやらの内容聞いたらわかったけどな」

そう、紫蘭国王女エーメンティアは、吉凶併(あわ)せ持つ運命の娘――。

祖国にあっては災いの種となり、他国にあっては繁栄の源(みなもと)となる……数奇なる運命を予言された少女なのだ。

早い話、彼女を手に入れれば、翼飛は繁栄を約束されたこととなる。だからこそ、攻め滅ぼすもたやすい紫蘭にわざわざ和平を申し入れた。

とまあ、そのあたりのことまでは想像できるが、それ以上の意味や価値があったとは、まさに初耳だった。

（つまり、あのお姫さんは、紫蘭以外の国にとっては福の神で、しかも聖石の子供ってんなら、アスカニーリ神殿との関係も親密になれるって特典つきなわけか……）

なるほど、大地の恵みという意味において、南方諸国より恵み多いとは言い難い翼飛にとっては申し分ない花嫁御寮である。

と、そこまで考えたとき、イイオーンはふっと別の可能性に思い至った。

「え、と。ちょっと待て。ってことはもしかして、同じこと、紫蘭以外の国全部に言えることだったりしないか？」

セイは答えなかった。

なにを今更――とばかりに肩を竦める仕種が、イイオーンの神経を逆撫でる。

だが、これに関してはイイオーンに反論の余地はなかった。

（なーんか、やたら襲撃多いと思ってたけど……まさかなあ、そんなことだったなんて……想像もしてなかった）

あまり嬉しくない情報だった。

そういうことなら、翼飛にたどりつくまで、いっさいの油断は禁物ということにな

るからだ。もともと楽をしたくて引き受けた仕事ではなかったが、問題の王女エーメンティアを目にしてしまったいま、気鬱は晴れない。

（あーんな女、争うやつらの気がしれねえや）

それでも、守るしかないのだ。

万が一にも、翼飛を敵視する国が、かの王女を手にすることなどないように。

翼飛は、イイオーンにとってもかけがえのない唯一無二の故郷なのだから。

（なんて、面倒くさいことになったんだ……）

八つ当たりする対象を求め、周囲に視線を巡らせたイイオーンは、次の瞬間、かけられた声ゆえに、なにかがストンと落ち着くような錯覚を覚えた。

「待たせちゃってごめんなさい！　あのひと、疫神に入り込まれたあのひと、ちゃんと大丈夫!?　薬湯、できたから……やっと、できたから……だから」

振り返ると、息せき切ってこちらに駆け寄ってくるカートーンの姿があった。

「大丈夫だ」

としか、彼には答えられなかった。



2

幸いにして、三度目の襲撃を受けることなく、一日を終えた一行は、近くに集落もないこともあり、野営を組むこととなった。

侍女たちは即席の竈で料理を作り、護衛団の男たちにふるまっている。イイオーンが意外に思うほど、その様子は板についており、彼は紫蘭に対して抱いていた印象を、少しだけ改めた。

（ふーん、優雅だけが取り柄の役立たずってわけじゃないんだ……）

これまで彼が見てきた上流階級の女性やその周囲の人物ときたら、役にも立たない矜持ばかり高く、火を熾こすことさえできない無能者揃いだったものだから、彼女たちに対する好感度はいやでも上がった。

料理自体美味いとなれば、なおさらというものだ。
（紫蘭側としちゃ、こういう局面を予想して、ああいう面子を揃えたってわけかな？
あのお姫さん除けば、かなりの荒事にも対応できそうな連中揃えてるみたいだし……）
戦闘面はともかくとして、足手まといにならない人材を選んだ――という線はいかにもありそうなことだった。
もっとも、問題の王女があれでは、周囲の苦労が減じることはないと確信できてしまうのだが。
思い出したとたん、ついふう、と息をついてしまうイイオーンだった。
紫蘭国王女エーメンティア――彼女を初めて目にしたときのことは忘れられない。
漆黒の髪と瞳、象牙の肌――傷ひとつない優雅な指。
そして、自分を見つめたあの冷ややかな眼差し。
特権階級に生まれ育った者のみが持つ傲慢さを、かの王女は身にまとっていた。
同じ黒髪黒瞳でも、カートーンとはまったく違う目をしていた。いや、なまじ同じ

色彩を持ち、それでいて全然違う雰囲気を纏うからこそ、カートーンに意識が向いたのかもしれないが。

（どんなありがたい福神か知らねえが、あんなの嫁に迎えて、幸せになれるとは思えねえんだがな……）

それぐらいなら、福神の恩恵なしでも、あの鼻っ柱の強い侍女のほうが、よっぽど可愛いし、一緒にいても楽しいと思う。

……まあ、自分がどうこう言う筋合いでないことは百も承知の上なのだが。

「実際、ガラじゃねえわ」

つぶやき、仮眠用の天幕へと歩き出したイイオーンは、視界の隅に意外な人物の姿を認め、足を止めた。

人目を憚るように、カートーンが、頭巾で顔を隠した何者かを伴って、怪我人を収容してある天幕に入っていくのが見えたのだ。

（なにやってんだ？）

なんとはなし気になり、後を追おうと一歩踏み出したときのこと、背後から声をか

けられた。
「どうした？」
セイだった。
「あ、いや……別に……」
適当に誤魔化す言葉も見つからず、曖昧に答えたイイオーンに、セイはあっさり言い放った。
「見張り、行くぞ。夜襲がないとも限らないからな」
もっともな言い分だったが、イイオーンはつい尋ねずにはいられなかった。
「あんたさあ、セイ。ずいぶんあのお姫さんに入れこんでるみたいだけどさあ……そんなに頑張るだけの価値、あの姫さんにあるわけ？　それとも忠義とはそういうもんだって固く信じちゃってるとか……？」
前者ならともかく、後者であればついていけない。
そんなイイオーンの思いを読み取ったのか否か――セイは小さく口元を笑みに歪めた。

「おれは、あいつを殺すために、あいつに会いに行ったんだ。ところが、あいつは自分を殺す必要はないとおれを説得しやがった。いいか、殺される立場のやつが、自分を殺す必要はないって言い切って、殺す気満々だったおれを説得したんだ。しかももしこの先、死ぬしかないような状況に陥ったら、真っ先にその首、おれにくれてやると約束までしてくれてな……そこまで言われたら、そばを離れるわけにはいかないだろう？」

だから、おれはあいつのそばにいるんだ。

セイの言葉に、イイオーンは一瞬声を失った。

命のやりとりが日常茶飯事であるイイオーンにしても、その状況は異常だと思わずにはいられなかったからだ。

（自分を殺しにきた相手を前にしたら、普通、命乞いなり、取り引き申し出るなりするもんだろうよ？　なのに、刺客を相手に説得……だと？）

あり得ない――と思った次の瞬間、脳裏に浮かんだエーメンティアの顔を思い出し、そういうこともあり得るかもしれない、と考え直した。

もっとも、エーメンティア及びセイに対して抱く奇々怪々度は一気に跳ね上がったのだけれど。

「わけ、わかんねえ女……」

本音そのものを、ぼそりと洩らしたイイオーンに、セイが珍しく同感だとばかりにうなずいた。

「確かに、それは言えるな」

軽く肩を竦め、セイはすたすたと離れていった。

取り残された体のイイオーンは、思いきり顔を顰め、首をかしげることとなる。

「なんだっていうんだよ、いったい？」

と、そうつぶやいた途端、カートーンを見失ったことを思い出し、慌てて周囲に目をやった……が、すでに彼女と謎の同行者の姿は跡形もなかった。

（もしかして、セイのやつ、おれの気を逸らすために声をかけてきたんだとか……？）

考えてみれば、確かにその可能性は充分にありそうなことに思えた。

だとしたら、彼の話も半分――もしくは完全な攪乱とみなすべきかもしれない。常識的に考えれば、まずありえないような内容であったことは確かなのだから。

そう、普通であれば、まずあり得ぬ話だ……エーメンティアを目にしたことのない人間が聞けば、まず間違いなくでたらめだと言い切るに違いない。

だが、実際に王女を目にした身としては、セイの言動に納得してしまう部分が生じてしまうのだ。あの女性なら、どんな非常識な事態も生じ得る、と。

得体がしれない。魔女とはああいうものかもしれないと、思ってしまう。

ちりちりと、項が焦がされるような刺激を覚える。

どうしても、なにがあっても受け入れられないなにかを、あの王女は内包している。

イイオーンの心がざわめいた。

(あの女、いっそのこと……)

思いが実を結ぶ直前、外部からかけられた声が、彼の意識を現実に引き戻した。

「イイオーン？　そんなところでうずくまって、なにしてるの？」



馴染みとなった少女の声に、彼の意識から危険な思いが弾き飛ばされる。
カートーンだった。
「お前こそ、なにしてるんだ？　さっき、見たぞ。怪しげーなやつと一緒に、なんかこそこそしながらどっかに出かけようとしてたよな。いや、実際出かけたんだったな」
後を尾けるつもりが、セイに捕まったせいでできず、実のところ、けっこう腹を立てていたイイオーンは、かなり辛辣な口調になっていた。
しかし、カートーンはあっさりしたものだった。
「あら、視線を感じると思ったらあなただったの？　なんだ、がっかり……だったら、あんなに警戒する必要なかったんじゃない……」
「……おい？」
いったいそれはどういう意味なんだ？
と、問いかけたイイオーンに、少女はあっけらかんと答えた。
「やー、だからね。うちのお姫さまってば、紫蘭以外の国にとっては福神みたいな存

在だし、まあ翼飛が機先を制したってことにはなってるけど、早い話、先に奪ったもん勝ちみたいな状況じゃない？　それだけならひたすら身辺警護だけすればいいだけの問題かもしれないけど、姫様、自分にできることはなるべく自分でやりたいって方で……でもって、さっきも、疫神にとりつかれたひとがいるって、どっかからか聞いちゃったらしくて、絶対治すんだって言い張ってくれちゃって……」

言葉が進むに連れ、カートーンの表情は暗く重いものへと変わりつつあった。

そのことに気づかぬわけではなかったが、イイオーンはそのときはまだ、問題の焦点を探り当てられずにいた。

だから、気休め以外の何物でもない言葉を口に乗せたのだ。

「もしかして、さっきの重装備の怪しさ満点のやつって、変装したお姫さんか？　ああ、なるほど、確か聖石の子供なんだよな。おおっぴらに動くわけにはいかないから変装したってわけか……なるほどなるほど、けっこういいとこもあるじゃないか」

本気で見直すつもりになっていたイイオーンだったのだが、カートーンの尋常でない反応に目を瞠らされた。

「……どこが……!?」

少女の双眸には、尽きせぬ絶望と怒りが宿っていた。

「嫌いよ、大嫌い！　あの女……祖国には災いしか呼ばない女……！　他国にとっては福神となると言われているけど、この刺客の送りこまれようを見れば、結局災いの種としかならないってことははっきりしてるわ！　なんで、あんな女が生まれたの!?　さっさと死んでしまえばよかったのに……っ！」

血を吐くような叫びだった。

少なくとも、イイオーンにはそう聞こえた。

だから、思わず口を滑らせてしまったのだ。

「なら……殺してやろうか？」

カートーンの表情が一変した。

「……殺気が増した、な」

ぽつりと、黒髪の少女がつぶやいた。
答えるのは、そばに控える青年だった。
「仕方あるまい。そういうことになってるんだからな」
「星の巡り？　あるいは予言か。みな、勝手なものだ」
「そう言うな。巫女の予言はそれだけ特別だということだ。絶対だと信じる者も多い……というより、お前が例外なんだ。いい加減、自覚しろ」
冷ややかに言い切る青年に、黒髪の少女は、逆に鼻を鳴らして答えた。
「共犯のくせに、よくも言う」
これには青年も口を噤んだ。
代わりとばかりに、彼は新たな警告を口にした。
「気づいてるとは思うがな。護衛のなかに、ひとり妙な気配を放つやつがいる」
それを聞くなり、少女が破顔した。
「ああ、あれだね。出会ったころの誰かさんそっくりな目をしたやつだろう？　あんなに敵意を全面に押し出してちゃ、いやでも目につくってものだね。どうやらわたし

のことが気に入らないようだが、なぜかな？　ちゃんと姫君然とした態度で臨んだはずなんだけどねえ……」

危機感をまったく感じさせない口調でそうつぶやく少女に、青年があきれたような目を向ける。

「面白がってる場合か。若いが腕は確かなんだぞ、万が一のことにでもなったら……」

「ならないさ、それこそ誰かさんが体を張ってでも助けてくれるんだろう？　第一、あれは元凶じゃない。あの青年からは腐った臭いがしないからね」

それが、ただの暗喩でないことを知る青年は、ふっとため息をついた。

「今度は臭い、か」

「そう。もう臭くて臭くて……鼻が曲がりそうだよ、まったく。腐った卵の臭いを四六時中嗅がされてごらんよ、いい加減世を儚みたくなってしまう」

鳥肌が立つとばかりに、両腕で自らを抱きしめる少女の双眸には、まんざら冗談とも言い切れない光が宿っていた。



「確か、イヤな音が聞こえると言ってた時も、似たようなグチをこぼしてなかったか？」

揶揄するような青年の指摘に、少女は顔を険しくした。

「感じないやつはいいよね。ああ、あの音！　いま思い出してもぞっとする……玻璃の表面を刃物で引っかくようなあの、どうにも言いようのない忌まわしい音！　あんなのがずっとつづくぐらいなら、いっそってぐらいにひどい経験だったってのに、わからない誰かさんは、平気でそんなことを言うんだ。なんて薄情なやつなんだろう」

冗談まじりとわかる、だが幾ばくかの本気の恨みをこめたとわかる眼差しを投げかけながら、少女は大仰に嘆いてみせた。

だが、青年は動じない。その程度で動じられるほど可愛い経験を積んではいないのだ。

「体に変調を来さないのなら、まだましな方だってことだ。今回は特に根が深そうだからな。なるべく早く元凶は取り除くつもりだが、お前の体に直に負担がかかるようだと困ると思ってたから、ちょっと安心しただけだ」

さも些細なことだと言わんばかりの青年の台詞に、少女は不機嫌そうに顔をしかめた。

「精神的負担だって、馬鹿にはできないんだよ？　病は気からって言うじゃないか。この鼻の曲がりそうな臭いのせいで、体調を崩さないって保証はないわけだし、そういうことを心配してくれたりはしないわけかい？」

あからさまに拗ねてみせた少女に、しかし青年は手をひらひらと振ることで答えた。

「お前の強靭な精神力なら心配いらないさ。そんなに臭いが気になるのなら、香でも焚いたらどうだ？　馬車が揺れて危ないというのなら、精油を手巾にでも垂らして気を紛らわすとか」

方法はいくらでもあるだろう？

勝手なことを言うだけ言って、青年は腰を上げた。

慌てたような声を上げたのは少女の方だった。

「ちょっと……！　もう、行くの？」

相手が引き止めたがっていることに、気づかぬはずもなかろうに、青年はあっさりとこう返した。

「いつまでも許嫁持ちのお姫様が、護衛団の一員とはいえ男とふたりっきりでいるのはまずいだろう。たとえとんでもない田舎育ちで、自分の出自なんて知らずに伸び伸び育ったとはいっても、いまのお前は紫蘭の王女で、翼飛の次期王妃なんだからな。どこからどんな噂が飛びだすかもわからないんだ。気をつけるにこしたことはない」

あまりにもまっとうな言い分に、反論できずにいる少女を置いて、青年は天幕を出ていった。

取り残された体となった少女はぶつぶつと不満をこぼすしかない。

「そんなの、言われるまでもなくわかってるんだって……だけど、気分転換ぐらいしたいじゃないか。わたしが思いきりグチとか言えるのは、自分だけだって知ってるくせに、なんだってあいつはああもつきあいが悪いかな？　だいたい、想像力も欠如してるんだ、あいつときたら。いくら香なんて焚いても、実際の臭いじゃない臭い、誤



魔化せるわけないじゃないか。よしんばできたとしても、腐った卵の臭いと香の匂いが混ざり合って、とんでもない状況になるだけだって、想像もできないのかね」

不貞腐れた少女は、ひとしきり相手をしてくれなかった青年に対するグチをぶちまけた挙句、癇癪をおこした。

手近にあったクッションに当たり散らすだけ当たり散らした後、少しだけ冷静さを取り戻す。

「ま……、言ってることは正論なんだけどね」

わかってはいても、認めたくないことと時はあるものだ。

そんな時、気を許せる相手についグチをこぼしたいと思ってしまうのは、無理からぬことだと思うのだが、それは自分の甘えなのだろうか。

他の誰に対しても、そんなことは思ったことはない。

あの青年——セイにしか、そんなことを感じたことはない。セイだからこそ感じた、思った、と言い換えてもいい。

なのに、ふたりの距離はなかなか縮まらない。

「あいつ、まだわたしのこと、殺したいと思ってるのかな？　いや、希望的観測も含めてそれはもうないと思うんだけど……思いたいんだけど……うーん？」

婚姻を結ぶために、他国へと移動中の少女は、そんな自らの立場を忘れたかのように、全然違う難問と格闘を始めた。

そのころ、天幕を出た青年がなにを考えていたのか、彼女には知る由もない。

「病は気から、だあ？　言いたいのはこっちの方だ。臭いや幻聴や幻覚ぐらい、なんだっていうんだ。それぐらい、気をしっかり持って対処しろと言うものだ」

もっと最悪な現象を、彼――セイはすでに体験していた。

あの少女は世界の気の歪みに触れた時、第六感を含む感覚でそれを受け取る。

今回の幻臭や、前々回の幻聴、ほかにも幻覚の類いもあったが、そんなものはおとなしい害のないものだと思う。

一番恐ろしいのは歪みに触れた途端、肉体的痛みとして感じる場合だ。

あの日も、彼女は普通に目覚め、挨拶してきた。

なのに、歪みを感じた瞬間、彼女の心臓は動きを止めた。突然ぱったりと倒れた彼

女を胸に抱き、その鼓動が消え、その息吹が消え、彼女という存在が永遠に失われるかもしれないと思った時に自分が感じた焦りと恐怖は、恐らく誰にも理解できないだろう。

世界そのものが消失するほどの衝撃だった。

二度と、あんな思いは味わいたくない——そう思い、彼女のそばにいることを選んだ。殺すつもりだった彼女に対して、なぜここまで強い執着を覚えてしまったのか……その記憶も、今となっては曖昧でわからない。

だが、あの時の身も凍るような恐怖は忘れられない。

決して。

「馬鹿野郎」

セイは言い切った。

心は……届かない。

両手で口元を抑えながら、カートーンはうずくまっていた。
（なんてこと……わたしったらなんてことを……）
口走ってしまったのか。
言うべきことではなかった。なんとしても秘めるべきことだった。
なのに――。
つい、口走ってしまった。理性が止めるより早く、この唇が言葉を紡いでしまった。
抑えようのない憎悪が、吹き出してしまった。
殺したいのは……消してしまいたいのは、『彼女』ではないのに。
違うのに。
（なのに、あのひとは『殺してやろうか』と言った……）
そして、それは本気だったのだ……そうでなければ、かえって楽だったかもしれないのだけれど。
けれど一番厄介で罪深いのは……きっと。

「わたし、きっと、罰を受けるわ……」
（でなきゃ、絶対、許されるはずがない……！）
絶望のままに、カートーンは泣いた。そんな彼女に声をかけてきたのは、彼女自身想像もしなかった人物だった。
しかも、ひざまずき、両手で顔を覆っていた彼女の後頭部に、堂々と膝をぶつけてくれさえした。
「なにするのよっっ!?」
噛みついたとたん、彼女は生来の威勢のよさを取り戻していた。
「なに、……って……？」
「この乱暴者！　謝るぐらい、しなさいよ！」
怒りのあまり、カートーンはそれまでの感情を忘れてしまった。
「あんたって、本当に、失礼なやつ！」
「なんだとぉぉ！」
恒例行事と成り果てている口げんかは今日も健在だった。

いつまでつづくかは……まあ、神のみぞ知る、というところだろうか。

「なにをぐずぐずしているの!?」

ヒステリックに叫ぶ女性は、周囲にきつい眼差(まなざ)しを投げかける。

「どいつもこいつも役立たず揃(ぞろ)い！　たかだか小娘ひとりの命、どうしてここまで手こずるというの!?」

殺してしまえばいいだけのことでしょう!?

ヒステリックに叫ぶ女性を前にして、男たちはうっすらと笑いつづけていた。

3

飽きる、もしくは懲りるということを知らぬかのように、襲撃はつづいた。
紫蘭の王女にして、次期翼飛王妃となる少女――エーメンティアの一行中、護衛担当のひとりであるイイオーンは、かなりうんざりしていた。
「掃いても掃いても、涌いて出やがる。ボウフラかっつーんだ」
思わず口をついて出た愚痴は、しかし答えを期待するものではなかったものだから、突然背後から声をかけられたときにはぎょっとした。
「そう言うな。姫君の事情は、お前も知っているだろう？　それだけの価値を、各国があの方に見いだしているということだ。つまり、無事に翼飛に送り届けられれば、お前の故郷は絶対的な力を手に入れるというわけだ。悪い話ではないだろう？」

おまけに、ここまで襲撃つづきの道中を、無事に切り抜けたとなれば、誰もお前の伎倆に疑問を抱いたりしないだろう？

賭けには違いないが、悪い話ではないと思うが――と、声をかけてきたのは、赤い髪と赤銅の肌の青年だった。

正式な名前は知らないが、セイと呼ばれている。

（出たな、姫さんオタク……）

到底口には出せない呼び名だが、これはイイオーンのなかでは、すっかり定着してしまっていたりする。

口に出せないのは、命が惜しいからであり、定着してしまったのは、セイがどこまでも姫君――エーメンティア中心であるのをイヤというほど見てきたからだ。

さらに言うなら、気がかりなことは増えつつある。

ほとんど連日の襲撃で傷ついた護衛の戦士たちの間で、エーメンティアの人気がこのところ急上昇中なのだ。

理由は簡単明瞭、傷ついた彼らのために、聖石の子供であるエーメンティア姫が手

ずから、自らが生み出した聖石の子供石を用いた薬湯を作り、侍女に届けさせたことが、いつのまにやら噂となったせいである。

おかげで一行中では、「慈悲深き聖女」像が出来上がりつつある。

イイオーンには、それがおもしろくない。彼は、自分の勘に信を置いており、それに従うならエーメンティアという女性が、決してそのような人物でないことを確信していたからである。

彼の印象のなかで、エーメンティアという女性は、とにかく得体の知れぬモノとしか表現できない存在だった。

外見的なことを言うなら、あれこそはまさに理想的な美少女と言える。

つややかな漆黒の髪、濡れた黒曜石の瞳、象牙の肌……紅珊瑚の唇。

目にした刹那、魂までも搦め捕られそうなほどの……美貌。

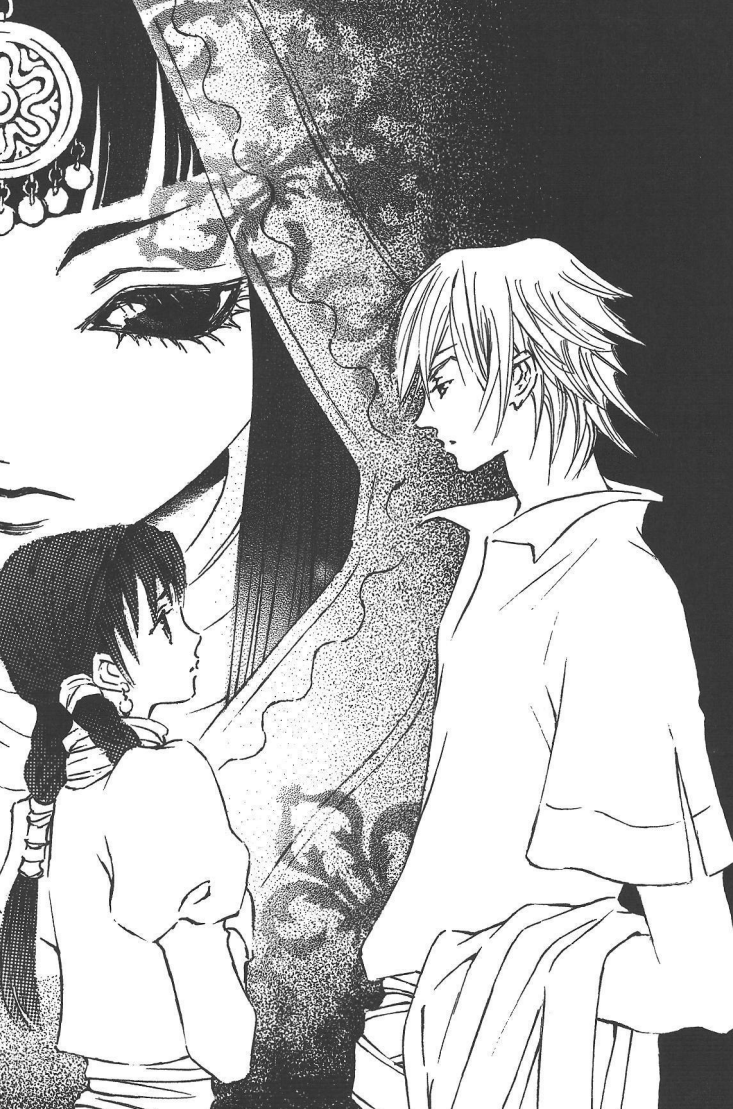
すさまじすぎるまでの――。

だからこそ、なのか――イイオーンは、彼女に対して警戒せずにはおれないのだ。

過ぎた美は、魔を呼び寄せる。あるいは魔そのものである場合も多い。

イイオーンが不安を覚えずにいられぬほどに、エーメンティアは美しすぎ、それだけではない不安感を彼にもたらした。
彼は、確信すらしていた。
あれは、魔の影響を濃く受けたモノだ、と。
ならば、とるべき道はひとつだ。
抹消するべきなのだ。彼女が翼飛の王太子妃となる前に。
魔の……瘴の気配を翼飛が浴びるその前に。
協力者も見つけた。いや、見つけたと思っていた。
だのに、土壇場で言を翻され、彼は正直なところ困惑していた。
王女のことを、大嫌いだと叫んだ少女――災いの種にしかならぬ王女のことを、許せないと言い切った。
思いは同じであったし、自らに課した務めもあり、だから誘うように告げたのだ。
『なら……殺してやろうか？』
と――。

少女は愕然とした表情を浮かべた。
失敗したか、と思った瞬間、彼は彼女の瞳に肯定的な光を認めた。
それで、心を決めた。
殺そう——あの魔女を。
思い決めた瞬間、心がふわりと軽くなるのを感じた。
それですべてはうまくいく。
魔を宿した少女が翼飛の中枢に座ることはなく、だから彼の故郷が、魔に汚染されることもない。
(あの王女さえ殺せば、うまくいく……)
ようやく、その答えにたどりついたというのに。
なのに。
(よりにもよって、あの小娘はぁぁっっっ!)
すんでのところで、「待った」をかけてくれたのだ。
腹立たしいなどという言葉では片づけられない。



思い出したくもないやりとりは、しかしイイオーンの意志に反して甦ってくる。

「ちくしょう」

と、彼は毒づいた。

本気じゃないよね？

そう問いかけていた。

「なにがだ？」

問い返されて、カートーンは唇を噛みしめた。

言葉にするには、多大な努力が必要な内容だったから、彼女はすぐに答えることができなかった。

だが、イイオーンが本気であることだけは確信していたから、無理やり勇気を振り絞った。

「……殺す、……って……」

誰を、とは言えない。

それはあまりにも大きな意味を持っていたから。

「なぜ、気にする？　大嫌いだと、お前も言っていただろう？」

単純明快すぎる言葉に、答えに窮した。

「それは……そうだけど……。でも……！」

「怖じ気づいたのか？　それとも、ことが成った暁に、お前に唆されたとおれが言うとでも思ってるのか？　なら、心配はいらない。おれは捕まるつもりはないし、たとえそうなったとしても、自分のやったことを他人のせいにするつもりはない」

だから安心していていい。

言われてますます恐ろしくなった。

彼がまぎれもなく本気で、エーメンティアを殺そうと思っているのがわかったからだ……その理由は知らないが。

「なぜ……？　どうしてそこまであのひとを殺したいの？　あなたはもう、そうしなければならないと心に決めている……どうして？」

答えは、簡潔だった。

「あの王女が、危険だからだ。おれにはわかる……あの王女からは魔の……瘴の気配がする。あんなものを迎え入れれば、翼飛では早晩、タチの悪い騒ぎが持ち上がるに決まってる。おれは……そんなことは御免なんだ」

その言葉に、思わず首をかしげたカートーンだった。

目の前の青年が、明らかに典型的翼飛人の特徴から外れていることが理由だった。

最北の大陸、豊珠ほど極地に近くはないとはいえ、針羅はかなり北に寄ったそれであり、しかも縦の長さでは豊珠に及ばない。そのなかでも北方に位置する翼飛の民は、その色素の薄さでもって知られている。

銀や淡い金……といった淡い色彩の髪を持つ者を多く輩出することで知られている。

肌は白く、瞳の色も淡い。

青、あるいは緑であることが多い。

ところが、イイオーンに関しては、この条件が当てはまるとは言い切れない。

南国を連想させるほどではないとはいえ、彼の肌は陽光の恵みを確信する程度には色彩を帯びており、その髪も瞳も、北方のそれとは微妙に違うのだ。

金褐色の髪と、薄茶の双眸は、生粋の翼飛人のものではありえない。

だから、カートーンは意外に思ったのだ。

なぜ、翼飛にそこまで気を……心をかけるのか、と。

素朴な疑問だった。

だが、その問いを口にした瞬間、カートーンは後悔した。尋ねたりするのではなかったと、心から悔やんだ。

イイオーンが、自嘲もあらわな笑みをたたえ、答えたからだ。

「おれのお袋は南の大陸から連れてこられた奴隷だった。なまじ学があって、こっちの言葉にも通じてたのがまずかったのかな。引かなくていい関心を引いちまったらしくて……結局、おれみたいな厄介者を産み落とす羽目になったってわけだ。誰もおれを見て、翼飛人だなんて思わない……けどな、他人がどう思おうが、おれにとっての故郷は翼飛だけなんだ。ほかに、故郷なんて、ない」

だから、故郷に仇なす可能性のあるやつは、放ってはおけないんだ。

きっぱりと言い切られた瞬間、胸を引き裂かれるような痛みを覚えた。

彼にとって、翼飛がいかにかけがえのないものであるのか、そしてその祖国にとっての脅威となり得る存在が、どんなものであるのか、まざまざと見せつけられたような気がしたのだ。

「……だから、エーメンティアを狙うの？　彼女が翼飛のためにならない存在だから……彼女を殺そうと思ったの？　証拠もなにもないのに？」

尋ねた彼女に、イイオーンは鼻を鳴らして答えた。

「証拠なんか必要ない。言っただろう、あれは魔に連なる者だって。おれの勘は外れたことはない。そしてそれだけの信用ってやつもしっかりあるんだ。だから、万が一ばれたときのことの心配なんぞする必要はないんだ」

だから、協力しろとでも言わんばかりの相手の態度に、かっとしてカートーンは叫んでいた。

「冗談じゃないわ！　絶対、絶対、承知なんてするものですか！　勝手なことばかり

言って……少なくとも彼女は翼飛に仇なすひとじゃないわ！　そのことをわたしがわかってる限り、わたしは……あなたが彼女を狙おうとする限り、必ず阻止してみせる。なにがあっても……絶対によ！」

その言葉を、イイオーンがどんな風に受け取ったのかはわからない。

臆病風に吹かれた侍女の精一杯の強がりと読んだのか、別の策謀に係わる者の放った信号と見なしたのか、いまさらながらに忠誠に目覚めた者の純粋な怒りと受け止めたのか……それは、本当にわからない。

（でも、イイオーン）

と、カートーンは思う。

（あなたが真実、『勘が働く』というのなら、エーメンティアの暗殺は、絶対に思い止まらなくてはならないわ）

少なくとも一行が翼飛に到着するまでは。

理由はまだ言えない。

けれど、それは確かなことだった。

（わたしにあなたを殺させないで……っっ！）

両手で顔を覆いながら、カートーンは祈った。

なぜなら彼女には、その時が来るまで、エーメンティアを守らねばならない義務があり、そうである以上、彼が王女を狙うというのなら、戦わねばならないからである。

そして――本気で彼を阻もうとするなら、それはいともたやすいことなのだ。

（お願い……！）

カートーンは両手を固く握りしめ、ひたすらにそう願った。

4

「絶対におひとりにはならないでください」
思い詰めた顔でカートーンがそう言ったのに対し、エーメンティアは軽く目を瞠った。
「それは、そうしているつもりだけど？　馬車にしろ天幕にしろ、周囲には数人の護衛がついてるわけだし」
わざわざ言われるまでもない、とでも言いたげな彼女に、王女と同じ黒髪黒瞳の侍女はかぶりを振った。
「そうではなく……お願いですから、常に信用できる兵士と……そう、セイさまと一緒にいていただきたいのです」

必死な顔でそう言う彼女を見つめながら、王女は小さく嘆息した。

「そういうわけにはいかないだろう。あいつは警護の要のひとりなんだから、外に目を光らせておいてもらわないといけないし、なにより輿入れ途中の身の娘が、特定の異性をそばから放さないというのは醜聞の種になりかねない」

正論すぎるぐらいに正論だったが、カートーンは頑なに「いいえ」と言い張った。

「そんなものは、後でいくらでも言い繕えます。誰か信のおける侍女のひとりも同席していれば、噂になったところでそれ以上の騒ぎにはならないわけですから」

だからどうか――懇願する侍女を、王女がしげしげと見つめた。

なにかを見通そうとでもするかのような、不可思議な眼差しだった。

「なら、カートーンがそばにいればいい。カートーン以外に信用してもよさそうな女性はまだ見つからないことだしね」

そんなことは――と言いかけた少女がはっと息を呑んだ。

「……まさか？」

あり得ないと言いたいのに、そう断言できないジレンマを感じさせる表情と口調だ

った。

そして、そんな彼女の前に、王女は懐から小さな巾着状の布袋を取り出して見せたのだ

なかにはいくつかの薬包が入っている。

「大した量じゃないから、みんなちょっとだるくなったりする程度だろうけどね、集中力は落ちるし、怪我なんかして体力が落ちてたら、けっこうきつい思いを味わうこと請け合いだね。持たされた本人も、平気でこれを入れた料理を口にしてたから、滋養強壮の薬かなにかだと言い聞かされてたって線が濃厚なんだけどね」

「そんな……」

信じられない、とカートーンがつぶやいた。

無理もなかった。エーメンティアの輿入れにあたり、紫蘭の上層部は同行させる人間について、徹底的な身元の洗い出しをしたのだ。

これには理由があった。

なぜなら、翼飛から、王女との婚姻を条件に講和の申し入れがなされ、紫蘭がそれ

を受け入れることを決定し、彼女に迎えを送ったとき――。

隣国の外れに建てられた、彼女が育った小さな屋敷は、賊とおぼしき一団に襲われ、彼女と側仕えの侍女、護衛数人を除く全員が凶刃に倒れていたのである。

そして、生き残った者たちも、受けた傷のためにほとんどが数日中に命を落としたのだ。

偶然というにはできすぎている。

だからこそ、紫蘭は――国王を始めとする重鎮たちは、細心に細心を重ねた人選をしたはずだというのに――。

呆然とするカートーンに、王女はなんでもないことのように告げた。

「本人に問題はなくても、言葉巧みに近づいて利用しようって輩がいる以上、無条件に信用するわけにはいかないってだけの話さ。ね、わかるだろう？」

わかりたいと思ったわけではなかったが、わかってしまった以上、カートーンとしても「いいえ」とは言えなかった。

なぜなら彼女はその、数少ない『生き残り』のひとりであったのだから。

けれど、だからといって、エーメンティアの提案に乗ることもできなかった。度重なる襲撃で、傷を負う兵士たちの数は増える一方なのだ。そんな彼らのために自身の知識を利用して治療を施すためには、どうしてもその場に足を運ぶ必要が生じる。

王女の先程の台詞が真実なら、なおさらというものだ。薬湯でもなんでも、自分の手で処方し、自分の足で持っていかなければ、到底安心はできない。

けれど、そこに常に王女が同行しているということになれば、だ。

狙ってくださいと、大声で喧伝していることになってしまう。

いや、これまで通り、王女が頭巾を深く被って、風体がわからないように変装してくれたら、『その他大勢』の目は誤魔化せるかもしれないのだけれど――。

だが、イイオーンはもう、あれが『エーメンティア』だと知っている。

だったら、到底欺けない。

エーメンティアを殺させるわけにはいかない……少なくとも、この道中では。

だとしたら……もしも、彼が仕掛けてきたなら、この手で引導を渡すしかないのだろうか……？

思わずぎゅっと、胸元を掻きむしるように握りしめた手を、王女が包みこむように握り返してきた。

「なにを、悩んでる？」

率直な問いかけに、カートーンは答えられなかった。

「じゃあ、誰を心配してる？」

ますます答えられなくなった。

イイオーンの企みを暴露すれば、その瞬間にも彼は捕縛されてしまう。

そうして処刑されてしまうのだ。実際の行動に移る移らないにかかわらず、王族に対する殺意を抱くことは、極刑をしか意味しないのだから。

「なにも……なにも……！」

頑なにかぶりを振るカートーンに、王女はそれ以上の言葉を重ねたりはしなかった。

その優しさに安堵を覚える反面、不安が募った。

彼に、彼女を殺させるような真似をさせるわけにはいかない。



そのためなら、どこまでも頑張れる……けれど。
そのつもりではいるけれど。
（でも、本当に……？）
できるのだろうか、はたして？
（わたしは……？）
迷う心を見透かしたかのように、王女がふわりと肩に手を置いた。
「用いては、駄目よ」
絶対に、駄目。
きつく、きつく、王女はカートーンに言いつけた。
「そんなことのために、あなたは命永らえたわけではないのだから」
と。

「小娘の首ひとつ取るのに、いつまで手間取ってるの!?」

癇性を思わせる甲高い声で、女性は目の前の男を詰った。
長い褐色の髪を結い上げ、極上の薄絹に身を包んだその女性は、床にひざまずいている男に、苛立たしげな眼差しを向けている。
「お許しを……なかなかの手練がふたりほどおりまして……」
馬鹿にしたように、女性が鼻を鳴らす。
「たかだかふたり？」
命の奪い合いの現場を知らない女性らしい反応に、しかし男は詳しく説明し、その理解を得ようとはしない。
無駄であることがわかりきっているからだ。自らに都合のいいことしか見ようとも聞こうともしないこの女性が、同時に非常に神経質で、些細なことで癇癪を起こすことを、長くはないつきあいのなかで男は学んでいた。
「殺してしまえばいいだけのことではないの」
はたして、女性はこともなげに言い切った。
それが至難であるからこその、この現状であることを、彼女は理解するつもりもな

いらしい。

できるものならとっくにやっている――とは、男も返さない。

さんざん仕掛けた企みの悉くが、そのふたりによって阻止されたなどという失態を、正直に雇用主に伝えるなど愚の骨頂だ。自らの評価を下げるような真似を、進んでやる馬鹿はいない。

男は正直、この仕事を請け負ったことを後悔しかけていた。

目前の女性が言う通り、たかが小娘ひとりの首だ。やりようはいくらでもあるはずだった。現にこれまでにも何度も、似たような仕事は片づけてきた。

相手の懐中に手のうちの者を送りこむ――あるいは作りあげる。これは割合とたやすいことだ。殊に今回のように、急ごしらえで作り上げられた一団にあっては。

手っとり早い方法としては買収があるが、それがかなわずとも少し調べれば、相手の弱みを握ることで言いなりにさせることは簡単だ。

それがなければ作ることも可能だ。

ところが今回の障害となる人物ふたりに関しては、それができなかった。いくら調

べても、そのふたりに関する情報だけが、どうしても集まらなかったのだ。
男の持つ情報網は結構な規模を誇っている。
それをしてわからない……謎の存在である人物が、よりにもよってふたりも出現したことに、彼は内心動揺していた。
ちりちりと、項のあたりに痒いような痛いような刺激を感じる。
よくない予兆だった。
だが、こんなことは初めてではない。元凶さえ取り除いてしまえば問題ではなくなるのだ。
元凶――そう、あのふたりの戦士たち。彼らさえ葬り去ることさえできれば、王女の首をとることなぞたやすい。
そのためにも――。
「是非ともお願いしたい……」
深く頭を垂れる男に、強大なる権力を握る女性は傲慢な目を向け、訊いた。
「なにをです？」

「翠玉の秘薬を」

ぴくり、と女性の眉宇が強張った。

「なんと？」

「ご依頼の件を恙なくやり遂げるためにも、翠玉の秘薬が必要にございます。ご指摘の通り、邪魔なふたりを片づけない限り、事態が長引くは必定と思えますれば」

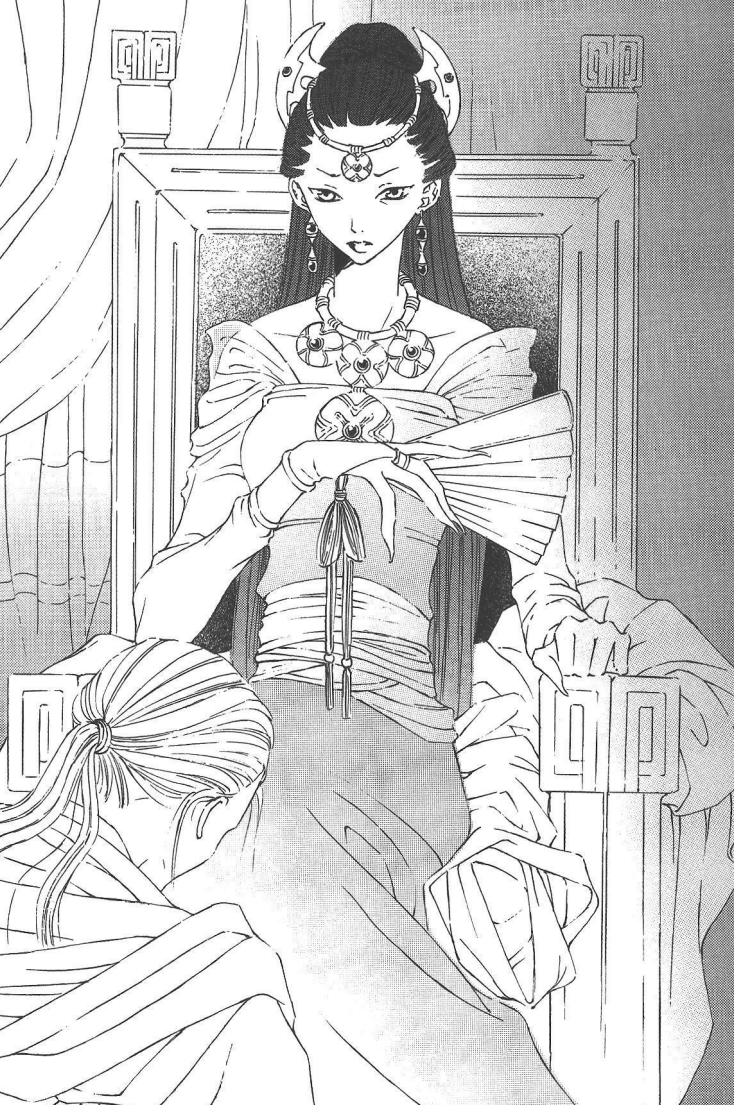
長引く、という言葉に、女性は考えこむ顔になった。

長引いた際のことを脳裏に思い浮かべたのだろう。すなわち、問題の王女が無事に翼飛に到着し、その王太子と婚礼をあげ、やがては紫蘭と翼飛の双方の王家の血を引く子供を出産し……。

男の意図した通り、女性はぎりり、と唇を噛みしめた。

理性を凌駕する感情の嵐に見舞われ、彼女は男に望むものを与えることを約束した。

男の口元に笑みが浮かんだ。



5

連日の襲撃が、突然ぴたりとやんだのは、紫蘭と翼飛の国境近くにさしかかったころのことだった。

それまでの騒ぎが嘘のように、エーメンティアたち一行を狙う襲撃がなくなった。

別段おかしなことではない。

狙うなら隙のある場所、あるときを――というのが襲撃者たちの論理のはずである。

紫蘭、翼飛双方の責任問題を考えた際、両国の面子にかけて譲れぬ一線となる場所における警戒は厳重である以上、そこを狙うのは賢いやり方とは言えない。

「うまく隙を突くためにも、ちょっと小休止ってところかね」

ぽそりとそう洩らしたセイに、イイオーンが「そうかもな」と応じた。
一行は予定されていた宿泊地のひとつである小さな村にたどりついていた。
強行軍を主張すれば、少し先の小さな街までたどりつけたはずなのだが、一団の指揮を執る隊長と、怪我人が多いから無理はさせたくないというエーメンティアの意向で、今夜のこの状況となったのである。
「まあ……助かるが……」
日頃の緊張に堪えるものを感じていたのだろうセイがこぼせば、それが本音であることを感じ取ったらしいイイオーンも素直に応じた。
「そうだな」
「ああ」
うなずくセイの言葉に、しみじみしたものを感じながら、イイオーンは焦りにも似た思いを隠しきれずにいた。
理屈ではなかった。この静けさがどうにも不気味に思えてならないのだ。
なにより、悪い予感がする。こうしたときのこうした勘は、戦いを生業とする者に

とって、軽んじていいものではない。気にかけるか否かで、生死が分かれることさえあるのだから。

ちらりと目をやれば、セイも浮かない顔をしていた。

「なあ」

「なんだ」

「あんた、もしかしたら知ってるんじゃないのか？」

我ながら唐突だと思いながら、イイオーンは踏み込んだ問いを放った。

セイは訝しげに眉宇をひそめながら、逆に問い返してきた。

「なにを、だ？」

「だから、あの姫さんを狙って襲ってくるやつらの正体っていうか黒幕が誰かってことをだよ。……あんただって気づいてるんだろう、襲ってくるやつらが、どうも二種類に分けられそうだってこと？」

ひとつは『福神』たるエーメンティアの身柄を奪い取ろうとする者たち。

もうひとつは、彼女の命を狙っているとしか思えぬ者たちだ。

後者による襲撃は、前者に比べ、圧倒的に少ない。だが、ないわけではないということが、気にかかって仕方ないのだ。

なぜ、彼女自身ではなく、その命が狙われるのか――。

自分のように、彼女を実際に目にし、魔に繋がる者だと確信した者が、ほかにいたというのでもなければ説明がつかない。だがそれは、あくまで自分の持つ情報のみを元にしてのことだ。セイはより多くのそれを持っているはずであり、引き出すことができれば、別のなにかが見えてくる可能性もある。

しかし、イイオーンが内心密かに『姫さんオタク』と呼んでいる青年は、彼女の不利になることは一切口にするつもりがないのか、空惚けて肩をすくめた。

「なにをいまさら……お前も言っていただろうが。姫は紫蘭を除くすべての国にとっての福神となり得る存在だと。みすみす翼飛にくれてやるぐらいならいっそ消してしまえと短絡的に考える輩が出たところで、なにもおかしくはないと思うが？」

一見筋の通った意見に、しかしイイオーンは誤魔化されなかった。

「それはあくまで、どうにも手に入らなかったらの話だろうが。実際、これから先は

そっちに鞍替えする国も増えていくだろうが……最初から、姫さんの命を狙ってたやつらがいたってのはどういうことだと思うのかって、おれは訊いてるんだよ」

相手のどんな小さな反応も見逃すまいと目を向けた彼に、赤い髪の青年はなおも白を切った。

「だから最初から、よその力になるようならいっそ殺してしまおうと思った国……というか、やつがいたんだろうさ」

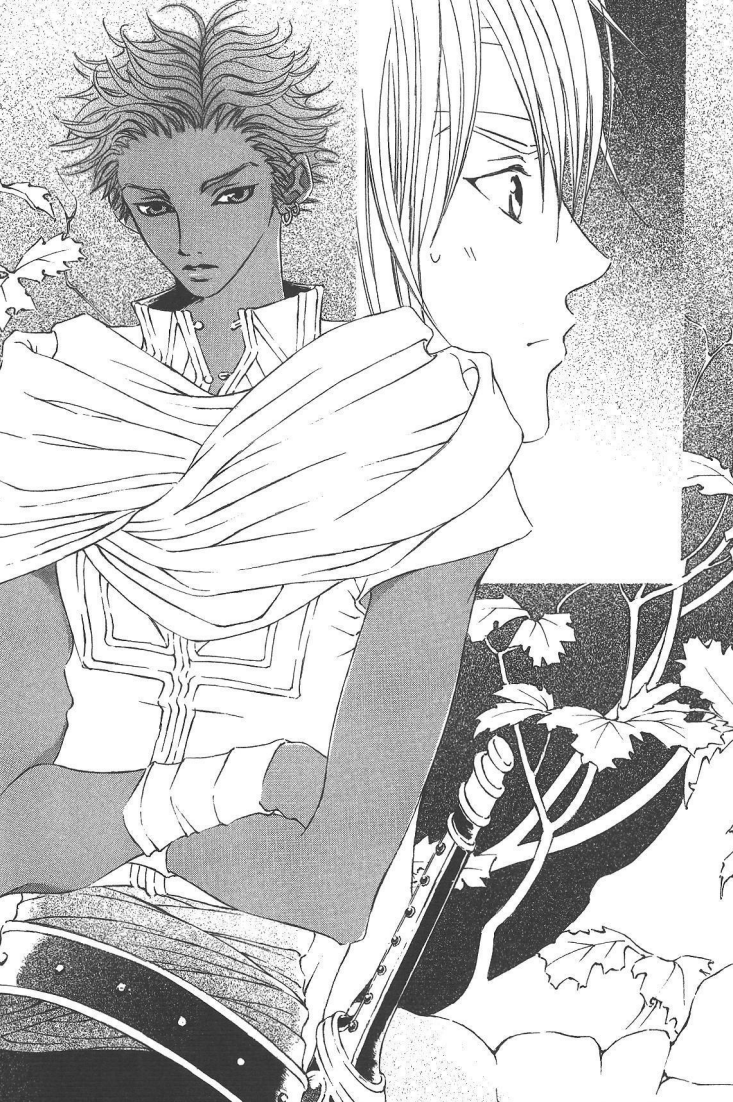
頑なセイの態度に「だから、どこに初っぱなから恩恵を無視できるとこがあるっていうんだよっっ!?」と怒鳴りそうになったイイオーンの脳裏に、ひとつの国名が浮かび上がった。

だが、すぐに彼はそれを否定する。

（まさか……あり得ない！）

確かに、ひとつだけその条件を満たす国はある。

手に入れれば至上の栄光をその国にもたらすとされる予言の王女――エーメンティア。その彼女を決して手に入れることができない国がひとつだけ。



だが、それはあり得ない話のはずだった。

彼女の祖国紫蘭に限って、彼女は福神ではなく『災いの種』でしかない。そう予言は告げているという。

だが、だからといって彼女の命を奪うというのは話がおかしい。全面降伏を余儀なくされた状況で、翼飛側からエーメンティアの輿入れを条件に講和を申し出られた紫蘭が、その鍵となる彼女を葬り去るなど、自ら滅びを招きよせることにほかならないではないか。なにより、そう思うのなら、紫蘭の国王は最初から……王女が生まれたそのときに、彼女を処分していたに違いないのだから。

あるいは、翼飛がこの条件とともに講和を申し出たそのときに――。

(いや、それはできない。問題の王女がいなければ、そもそも話にならないわけだから……じゃあ、いったん身柄を翼飛に預けた上で、責任は翼飛にあるという形を整えた上で、せっせと自国の王女に刺客を送りこんできた、と……?)

あまり気持ちのいい話ではない。

だが、可能性としては捨てきれないものがあるのは確かだった。

親子の情愛と呼ばれるものが、固く絶対のものであるなどとは、イイオーン自身信じていない。また、たとえ溢れんばかりの愛情を子供に注いでいたとしても、より大きな義務の前ではそれを犠牲にすることがあることも……不本意ながら、イイオーンは知っているのだ。

（だとしたら、あの姫さんは捨て駒ってことか？　いや、だがそれは話がおかしいんじゃないか？）

紫蘭が真実、エーメンティアのことを邪魔に思い、存在を抹消しようと思っていたとしても、それを行動に移すのは――後々のことを考えれば――彼女が紫蘭と翼飛の国境を越えた後、翼飛が彼女に関する全責任を負う立場になってからでなくてはならないはずではないのか？

だとしたら、彼女の命を狙ったとしか思えない、あの数度の襲撃を指示した黒幕は何者なのか。

考えれば考えるほど、まるで迷路にはまりこんだかのように、答えが遠ざかっていくような気になってしまう。

（だいたいなんだっておれが、こんな性でもないことに頭悩まさなきゃいけないんだか）

と、そう思ったとき、まるで彼の心中を読み取ったかのごとく、セイが皮肉げな顔で斬り込んできた。

「意外だな。お前がそこまで姫の事情に首を突っこんでくるとは……。てっきりお前は姫のことなどどうでもいいと思っているのだと……いや、逆に機会があれば姫に仇なしてもおかしくないと思っていたんだが？」

全身の毛穴という毛穴から、汗が噴き出るような緊張感に見舞われ、イイオーンは言葉を失った。

エーメンティアへの違和感、そして危機感――その果ての決意。

すべてうまく隠し通してきたと思っていた彼は、この言葉でもって、それがまったくの徒労であったことを気づかされたのだ。

（こいつは、こいつは……こいつときたら……っっ！）

形にならない怒りに身を震わせながら、セイを睨みつけた彼に、赤銅の肌の青年は

意味深長な笑みとともに、一言残してその場から立ち去った。
「訊きたいことがあるのなら、あの馴染みの侍女にでも尋ねてみるんだな。彼女は数少ない生き残りのひとりだ。なにが起こったのか、訊いてみるのも手だろうな」
それきり、何事もなかったように遠ざかっていく男の背中に向かって、イイオーンは馬鹿野郎、と毒づいた。
生き残り、という言葉が重く、鉛のように胸を占めていた。
なにかが、確かにあったのだ。それもこのエーメンティアの輿入れの騒ぎの前後に。生き残りという言葉から察するに、それが血なまぐさいものであったことはまず間違いないことと思えた。
そのことを、セイはカートーンに訊けと言う。
自分と同じくその騒ぎの『生き残り』だからと。
「ひでぇこと、言いやがる……」
唇を噛みしめながら、イイオーンはつぶやいた。
脳裏に浮かぶのは、こまねずみかリスのようにあちこちで働いている少女の顔であ

る。

主人である王女を誰より憎んでいる少女――同時に我が身を捨ててでも守ろうとしている少女。

あんな、張りつめた状態の彼女に、いったいなにを問えというのか。

「卑怯なやつ……」

憎悪すらこめてつぶやくイイオーンであったが、脳裏からセイの言葉を消し去ることはできなかった。

答えを得られぬ不満が、全身から噴き出しそうだった。

紫蘭国王女エーメンティアは夢を見ていた。

忘れようにも忘れられない、あの恐ろしい夜のことだ。

「お逃げください！」

侍女頭であり乳母でもあったニイィダが寝室に駆け込んできた、あの夜――。

明確な、自分に対する殺意を感じ取り、彼女は言われるままに護衛の兵士とともに暗闇のなかに飛び出した。

彼女は聖石の子供であり、感覚的に決して鈍いわけではなかった。

いや、逆だった。鋭すぎる感性ゆえに、彼女は生まれて以来ずっと、自分に向けられていた殺意を察知していた。

その攻撃的な意識に常にさらされつづけたがゆえに、疲弊していたと言っても過言ではなかった。

疲れ切った彼女は、結局襲撃の気配を感じ取ることができなかった。

結果として、彼女がそれまで暮らしてきた屋敷は炎に包まれ、追われるように彼女は山に身を隠した。

そばにいるのは数人の兵士とふたりの侍女――。

彼らが、なにがあろうと自分のことだけは守ろうとしているのがわかって……わかるだけ、申し訳なくなった。

（狙われてるのは、わたしひとりなのに……）

だからといって、「逃げて」とも言えなかった。

何度も何度も、似たようなことがあった。そんな時そう言う度に、皆から口を揃えたように「馬鹿なことを仰らないでください」と、叱りつけられてきたからだ。

けれど、と彼女は思った。

今回ばかりはこれまでとは勝手が違う。

心臓をしめつけてくる力が……殺意が、違う。

今度こそ、殺されてしまう。相手はそのつもりでいるのだ。

だったら、今度こそ、決めなければならない。おとなしく殺されるか、反撃してでも生き延びるか——その究極の決断を下さなければ。

どちらを選ぶのが正しいのだろう。

どちらが正しく、どちらが正しくないのだろう。

(……いや……っっ!)

それは、すでに過去に選び取った答えだった。

(でも、いや!)

心は、逆らいつづける。

（わたしは同じことを選びたく、ない――！）

夢との共鳴を拒絶したエーメンティアは、ゆっくりとだが確実に、現実に意識を添わせる。

そうして現実に戻ってきたことを確認すると同時に、彼女はこの現実を認識した。

すなわち、周囲で生じている騒ぎを。

彼女たち一行を迎え入れた村は、正体不明の賊に蹂躙（じゅうりん）されようとしていた。

6

カートーンは、勘の鋭い少女だった。いや、それは『勘』などという一言ですまされるものではなかったかもしれない。

不吉な胸騒ぎを覚えるなり、彼女はエーメンティアの部屋を目指した。狙われているのが彼女であることをカートーンは疑いもせず、なにがあろうとも守ろうと心に決めていたのだ。

祖国である紫蘭以外の国にとって、福神たる王女エーメンティア。

居るだけで恵みをもたらす、生まれながらの福神。

神々の愛し子と呼ぶ者も多いという。

（どこが……なにが……）

と、カートーンは思わずにはいられない。
彼女は知っている――エーメンティアに関わる、これまでに起こった様々なことを。
エーメンティアが、到底『福神』などと呼べる存在でないことを。
災いの種にしかならない者だ、エーメンティアは。でなくてどうして、こんな騒ぎが起こるというのか。
消さなければならない……抹殺しなければ、ならない。
そういう存在なのだ、エーメンティアという王女は。
放っておけばいい――そんな内なる声も聞こえた。放っておけば、他人がすべてを片づけてくれる。エーメンティアは死に、自分は自由を得られるのだ……と。
けれど、それはどうしてもできないのだ。
なぜなら自分が付き従うエーメンティアに罪がないことを誰よりもよく、カートーンは知っていたからである。
（あのひとを、殺させるわけにはいかない……）

強く、強く、そう思う。

……だから、カートーンはいま、エーメンティアの寝室を目指して走っているのだ。

「エーメンティアさまっっ！」

叫びながら走るカートーンの視界の隅に、あざやかな朱が飛びこんできた。

炎、だった。

「うそ……」

知らず、口元を手で覆い、彼女はつぶやいた。

「火を……かけるだなんて……」

一夜の宿を借りたのは、本当に小さな村だった。

度重なる襲撃のせいで、予定通りに進めなかった一行がもちかけた相談に、いやな顔ひとつせず、受け入れてくれた……善良なひとたちの住む村なのだ。

（なのに……こんな……）

こんな、ひどいこと……！

遠くからも近くからも、罵声や悲鳴が聞こえてくる。
偶然ではあり得ない。これはすべてエーメンティアのせいなのだ。
彼女の命を奪うために、敵対者はこれだけのことをしでかしたのだ。
（だったら、もう、エーメンティアは死ぬべきだわ）
紫蘭国王女エーメンティア――彼女が死ねば、こんな馬鹿げた騒ぎは収まる。
そうすれば、もう、二度と彼女のせいで命を落とす者は出ない。
（彼女を……殺さなければ……）
固くそう、胸に誓い、王女の寝室を目指して走るカートーンは、しかし不意に腕を取られて振り返った。
「誰!?」
邪魔をしないで！
怒鳴りつけたはずが、逆に怒鳴り返された。
「てめえこそ邪魔すんじゃねえよっっ！　姫さんなら無事だ。わざわざもぬけの殻の火の海になった部屋になんか飛びこまれちゃ、面倒ばかり増えるってもんじゃねえ

か！　いいから下がってろっ！」

金褐色の髪が、炎の色を映して赤く輝いていた。

「……イイオーン……」

知らず、その名を口にした彼女に、青年は「いいから避難してろ」と言った。

「邪魔だから、とにかくどこでもいいから安全なとこに避難しろっつーの。邪魔なんだよ、とにかく邪魔なわけ！　わかったらさっさと出てけって言いたいわけだ。四の五の言うようなら、殴ってでも連れ出すぞ？」

イライラしているのは明らかだったが、先日感じた不安な空気はどこにもなく、ほっと安堵した。

それでも、念のために訊いておく。

「いい機会だからって、姫さま殺そうとかってつもり、まったくないって誓える？」

この言葉に、イイオーンは仏頂面で答えた。

「やるならさっさとやってるさ！　本音を言うなら、あんな女、さっさと殺してやりたいさ。だけど邪魔ばっかりするやつらがぞろぞろ出てきやがってさ……まったく、

もう……」

お前はお前で、大嫌いとか言いながら、体張ってでも庇うみたいなこと言い出すし……と、どう聞いても愚痴としか思えないことを洩らす青年を前に、カートーンはなぜだか笑ってしまった。

「じゃあ、悪いけど、もうちょっとだけ待っててよ」

そうしたら、もう邪魔はしないから――。

そう言いかけた彼女は、吹き抜ける風にぴくり、と反応した。

「うそ……！」

つぶやく彼女の双眸は大きく瞠られていた。

「うそぉぉっっ！」

その声には恐怖が宿っていた。

彼女がいったい何に対して衝撃を受け、恐怖したのか――その答えは約一刻後に明らかになった。

賊たちから逃れ、火事から逃れた村人とエーメンティア一行の者たちが、原因不明

の不調を訴え始めたからである。

もはや一刻の猶予もないと、イイオーンは足早にひとつの天幕を目指していた。

賊の放った火によって、村の半分が炎に飲みこまれた。

幸い、この季節には珍しい雨が降ったおかげで、大半は消し止められたが、満足に使える家はなく、一行は野営用の天幕を村の外れに設営していた。

とはいえ、焼け出された村人たちまで含めれば、到底足るものではない。老人や子供、そして怪我人を優先してもなお、充分とは言えないのが現実だった。

無傷の者はもちろん、軽傷ですんだ者たちも、外で動き回っている。傷の治療、消火活動、さらには賊の再度の襲撃を警戒しての見張り等々。

疲れ切っているだろうに、彼らは休もうとはせず、働きつづけている。

（ひどいありさまだ……）

彼らの姿を目にし、また重傷者を運びこんだと思われる天幕から聞こえてくるうめ

き声を耳にしながら、イイオーンは思わず唇を噛みしめる。

戦場にあっては珍しくもない光景に、しかし胸がしめつけられるのは、これがただひとりの人物のせいで引き起こされた事態だと、わかっているからだ。

家とともに、豊かとは言い難い蓄えを失った村人たちのことを考えると気が重くなる。紫蘭が仮に補償金を出したとしても、彼らの苦労はさして減じられないだろう。あるいは充分な調査も行われないまま、上層部が王女一行と賊の襲撃を無関係だと判断すれば、塗炭の苦しみをあじわうことになる。

翼飛との戦で敗北した紫蘭が、そう判断する可能性は高い。

さらには、火傷や怪我でない、不調を訴え出た数多の者たち――。

カートーンの呆然としたつぶやきが忘れられない。

勘に頼るまでもなく、紫蘭の王女が元凶であること、またこれより先、翼飛に災いをもたらす存在であることを彼は確信していた。

先程の怯えた少女のつぶやきが耳から離れない。

「まさか……まさか、翠玉の秘薬を……!?　いったい誰が……!?」

黒い双眸には恐怖が宿り、衝撃に全身を震わせていた。

「翠玉の秘薬？」

それはなんだ、と問うより先に、カートーンははっと息を飲み、駆け去ってしまった。

だが、彼女の洩らしたその一言が、イイオーンの心にもたらした効果は大きかった。

決定的だったと言ってもいい。

（やはり、あの王女が元凶だったんだ）

彼は確信した。

魔の宿主――災いを引き寄せ、周囲に死をまき散らすモノ。

翠玉の秘薬とはなんなのか、いかなるものなのか、彼はあるいはカートーンに尋ねるべきだったかもしれない、彼女の後を追い、捕まえてでも。

それが毒物であるのなら、その名を知る少女は、詳しい情報を持っているかもしれなかったのだから。解毒の薬湯の処方を聞き出すことができれば、苦しむ者たちを救

うことができるのだ。

だが、このとき、その必要性をイイオーンは感じなかった。

この事実だけで充分だと思ったのだ。

まるで裏返された硬貨のように、最前までとはまったく違う意識のありように落ち着いてしまった。

最優先されるべきは故郷――翼飛の勝利と平和。

翼飛に仇なすモノは、速やかに抹消すべきなのだ。

そしていま、翼飛にとって最も危険な存在とは――。

(決まってる)

あの女だ、とイイオーンは強く思った。

自分が感じ取った、エーメンティアの魔性――そして、その彼女にまつわる、国元の巫女が告げた言葉――。

『死と災厄の娘がやってくる。かの娘は歪められたる運命のなかに落とされた者。歪みのなかで数多の死により歯車が回れば、もはや止める術はない……』

歯車は回った――賊の襲撃とまかれた毒によって、すでに十人以上の命が失われてしまった。

王女は死と災厄の娘となる。

なんとしても彼女を殺さなければならない。翼飛に災いを運ばせるわけにはいかないのだから。

巡り合わせと言うべきか、いまが王女暗殺の絶好の機会であるのは皮肉なことだった。

王女とともにいち早く避難したおかげで、毒をほとんど吸わなかった侍女たちは、怪我人の治療に走り回っている。王女の守りは手薄と言える――セイはついているだろうが、彼が毒を多少吸いこみ、気分が悪そうにしていたのをイイオーンは知っていた。

通常であれば厄介この上ない障害となっただろうが、いまのセイが相手なら、充分に勝機はある。いや、いましかないと言ったほうが正確か……。

ちらりと脳裏にカートーンの顔がよぎった。

もう少しだけ待ってと言った娘――そうしたら、もう邪魔はしないから、と。
なにを思って彼女がそんなことを言ったのかはわからない。だが、もう待つわけにはいかないのだ。
（国境を越える前に殺さないと……）
死と災厄は翼飛に入りこんでしまう。
（待ってやれなくて、ごめんな……）
胸中で謝りながら、彼は王女のいる天幕を目指した。
愛してやまない、ただひとりの守るべきひとの面影を胸に抱いて――。

7

来る。
エーメンティアは直感した。確信したと言い換えてもいい。
来る——殺気が、近づいてくる。
（まだ、早い）
そう思う。
だが、それが自分の都合でしかないこともわかっている。
かたわらで、のそりと身動きする気配がした。
赤い髪の戦士——セイだ。
「どうする？」

簡潔すぎる態度で、彼は彼女に答えを求めた。

（どうする……か、ですって……？）

答えは決まっている……いや、決まっているはずだった。

まだ早い、その時には。だったら、退けるしかない……そう、思い、心決めていたつもりだったのに……。

気づけば、思っていたこととは全然違うことを口にしていた。

「潮時でしょう……」

と――。

本当は、もう少し時間を稼ぎたかった。せめて翼飛に入るそのときまで――そうすれば責任は祖国である紫蘭から離れることになる。たとえ自分が死んだとしても、戦に負けた祖国に、翼飛が責任を求めることはないと……そう思ったからこそ。

けれど、国境を越えてしまったら、それは翼飛の誰かに求められてしまうことになるのだ、福神となるはずのエーメンティアを守りきれなかった咎は……。

だから、公平に見れば、この事態もまた受け入れるべきものなのだろう。

自分でも意外なほど、あっさりと彼女はそう思った。

そう……翠玉の秘薬までもが持ち出された以上、もはや戻れる場所はない。

疎まれていることは知っていた。祖国に仇なす予言のもとに生まれた身である。暗殺の危機にあったのも、これが初めてではない。けれど、まさか……。

（紫蘭の屋台骨を揺るがすかもしれない危険を冒してまで……）

刺客が送りこまれるとは、思っていなかったのだ。

「疫病神扱いされるのには、いいかげんうんざりです。もう……終わりにしたい。いえ、これ以上被害を広めないためにも、終わりにしなければならないと思います」

その言葉に、赤い髪の青年は眉宇をひそめ、問いかけてきた。

「死ぬことになろうとも？」

エーメンティアはこくりとうなずいた。

「ええ、たとえ死のうとも……紫蘭を滅ぼす元凶になるのはイヤです」

はっきりと言い切った王女を前に、セイは小さな息をつき、そうして仕方なさそうに肩をすくめた。

「ならば、もはや言うことはない。だが、おれにはおれのけじめがある。それだけは譲れない……おれは、あなたの護衛なのだから」

エーメンティアがどんなつもりであれ、自分は自分の務めを全うするつもりだと、明言する青年に、王女は微笑んだ。

「致し方ありません」

こうなれば、運の強さを試すしかない。

これが『強』や『幸』のつく運であるなら、喜んで生き残るほうに賭けるところであったのだけれど、運の前につくのが『凶』とあっては、そうも言ってはいられない。

自分の生存が祖国に凶運しかもたらさないのだと知って以来、ずっと考えつづけてきたのだ。いかにして、祖国の安定を保つことができるのか、と――。

決して死にたいわけではない。けれど、紫蘭の未来と自分ひとりの命を秤にかけた時、出てくる答えは自ずと決まっており……。

ならば、自分の命で決着をつけるしかない。この命ひとつで、けりがつけられると

いうのなら。

翠玉の秘薬は紫蘭にとって最後の切り札なのだ。その正体と対処法を知られてしまっては、紫蘭は最後の楯を失う。

たとえそれが忌まわしい意味合いの強い代物であろうとも、絶対無二の楯であり刃である存在を世に知らしめるわけにはいかない。

（それぐらいなら、いっそ……）

秘密を胸に抱えたまま、死んだほうがましだと考える王女は、赤い髪の青年の、無表情ながら、どこか余裕を感じさせる態度に首をかしげた。

「……セイ？」

名を呼び、しかしそれ以上、なにをどう問いかけていいのかわからずにいる彼女に、青年はうっすらと笑うことで答えに変えた。

ぞくり、と背筋に寒けが走った。

なにがどうとは説明できない、だが本能的な恐れに戦いたエーメンティアの命は、この後一刻を待たずに潰えさせられた。

彼女の命を狙い、襲いかかってきたのは翼飛から派遣された護衛団のひとり――。

妄執に憑かれたとしか思えぬ勢いで、王女の天幕を襲撃した青年の目的は、赤い髪の青年によって阻止された。だが、利き腕の腱を断ち切られたとほぼ同時に、刺客はもう片方の手で、毒を塗った刃の短剣を的である王女に投げつけ、傷つけることに成功していたのだ。

刺客である青年――イイオーンはセイの刃の前に倒れた。だが、彼は的である王女を道連れにすることは成功したのである。

生まれた国にあっては災いの種にしかならないと予言された王女は、新たな祖国を得られないままに命を散らした。黒髪の王女が、いかなる思いを胸に抱いていたのか、いまとなっては知るよしもない。

そしてそれを知るための努力をしようという者もいなかった。

いくつもの思惑がからまった結果の、それが答えだった。

紫蘭の王都春蘭の中心に、広大な王宮が聳えたっている。
王族たちの住まいは、そのなかでも最も奥まった一郭にある。
国王とその正室を除けば、恐らく最高の警備を敷かれているといっても過言ではない一郭を、二十歳前後の青年が散策していた。
黒髪に象牙の肌、漆黒の双眸を持つ彼の面立ちは、国王のそれによく似ていた。無理からぬことである。彼は間違いなく、紫蘭国王の血を濃く引く者のひとりであったのだから。
青年の名はフィデリーン――庶出ながら紫蘭の第一王子にして、間もなく立太子の儀を迎える予定の、事実上の次期国王である。
翼飛との戦における敗北、また和平のためにさし向けられた、異母妹エーメンティアの病死など、ここのところ明るい話題に欠けた状況にあって、それでも彼の双眸に翳りはない。
不思議なことだが、晴々とさえしているように見える。
「……では……」

なにげなくつぶやいた風を装いながら、青年が言葉を発する。
周囲に余人の気配はない。だが、それは厳重に隠されているだけのことで、事実誰もいないわけではないのだ。
実際、彼が手を伸ばした柊の茂みの陰に、男がひとりひざまずいている。
「あの不幸な妹は、間違いなく死んだのだね？」
ささやくような彼の声に、相手はしっかりと『応』と答えた。
「殺したのは翼飛の不満分子で……あの哀れな妹は可哀相に、わけもわからぬ翼飛の抗争に巻き込まれて殺された……それで、間違いはないかい？」
「ない」
と、茂みに隠れている相手は答えた。
「ならば、いい」
フィデリーンはあっさりと言い切った。
ようやく長年の重荷を下ろしたような顔で、青年は息をついた。
「それなら、いい」

告げて、彼はふと後宮のある方角に目を向けた。
そこには、いまではなかなかに、直接対面することのかなわぬ彼の実母――側妃アーガンティアがいる。
己が血を引く息子を王座につけるために、正嫡の王女の運命を歪め、弄んだ女性が。
彼女の犯した罪はあまりにも重く、それゆえに……皮肉にも表沙汰になることはない。
空神神殿の巫女を脅し、予言をねじ曲げた罪は、十六年の時を経て、さらなる罪を呼びこんだ。翼飛の侵攻――そして、紫蘭の敗北。翼飛が王女を求めたことで、彼女は否応なく罪を重ねざるを得なくなった……。
妹に下された真実の予言を、フィデリーンは知っていた。外でもない巫女本人の口から聞いたのだ。
『其は吉凶をもたらす稀有なる者。
愛し望みし地には繁栄を、

厭い憎みし地には災いを、
決して違わずもたらすであろう』

そう――エーメンティアは福神であると同時に災神でもある存在だった。

吉凶を分けるのは、ただ彼女の心のみ――その事実ゆえに、アーガンティアは彼女の命を執拗に狙ったのだ。王女の憎しみが、間違っても自分や自分の息子の上にふりかからないようにするために。

（愚かなことだ）

と、フィデリーンは思う。

母には決して知られぬよう、彼はエーメンティアとの親交をつづけていた。実際に会ったことは数える程度だが、頻繁に文を交わしたことで、妹の人となりには通じていた。だから、彼女が母親の恐れるような娘ではないことを知っていた。

心優しい真っ直ぐな気性の妹は、歪められた予言の内容ゆえに鬱屈を抱えこんではいたが、それを余所にぶつけようなどとは考えもしない娘だった。それを知っていたからこそ……フィデリーンは逆に真実の予言を彼女に告げることができなかった。

己が感情ひとつで、その地の運命が決まるなど、人間には重すぎる力だ。負の感情から完全に解放された人間などまずいない。彼女が予言の内容を知れば、苦しむだけであることはわかりきっていた。災いをいかなる地にももたらさぬためには、彼女は感情を持たぬことでしか対応できないのだから！

哀れな……哀れな異母妹。王女エーメンティアは、皮肉にもアーガンティアの願い通り死ぬしか道のない娘だったのだとフィデリーンは思う。

だから、この結末には満足していた。そう……紫蘭、翼飛両国のためにも、彼女は死ななければならなかったのだから。

公（おおやけ）には決してできないことだが、翼飛が紫蘭を滅ぼし尽くさなかったのには理由があるのだ。紫蘭の王族のみに伝えられる解毒（げどく）不可能な毒――翠玉の秘薬。

量や投与の方法によって、さまざまな効果を発揮するこの薬物は、長年紫蘭を支えつづけてきた切り札だった。紫蘭に脅威（きょうい）をもたらしかけた国の要人は、この薬によってまず間違いなく命を散らしてきた。

暗殺を繰り返すことで、紫蘭は永らえてきたのだ。

そして翼飛はそれを知るからこそ、エーメンティアを求めた。武に重きを置く、かの国の上層部は、神を軽んじこそしないが、神殿の説く言葉より、揺るがしがたい現実を選ぶ傾向が強い者たちで構成されている。翼飛は福神としてのエーメンティアではなく、紫蘭王女――翠玉の秘薬の秘密を知る彼女をこそ求めたのだ。

だが、その目的は果たされることなく、彼らの思惑は潰え去った。手にかけたのが自国から派遣した兵士であった以上、翼飛が紫蘭に詰め寄ることはできない。もちろん戦勝国の権利として、かの薬に係わる秘密を求めてくるにはくるだろうが……かわす方法ならいくらでもある。

そうしたことも考えた場合、彼女の死は喜ばしいことだった。

運命とひとや国の思惑すべてが、エーメンティアの命を摘んだのだ。

そのことを兄として哀れに思う一方で、政治家でもあるフィデリーンは冷静に事態を受け止めていた。

「苦労をかけたな」

茂みにひざまずく青年――赤い髪の戦士に、労いの声をかけ、彼はふっと息をつい

た。

愚かな母の犯した罪を知って以来、ずっと深く呼吸することを禁じられていたような気がする。

だが、ようやく終わったのだ。

エーメンティアは死に、予言は真贋含めて意味のないものへと変化した。

それでいいのだと、フィデリーンは思う。

「餅は餅屋に……神の領分は神殿に任せるよ、わたしは現世のことで手一杯だしね」

悪戯っぽく告げた彼の言葉に、茂みからはなんの反応もなかった。

怪訝に思い、そちらを覗きこんだフィデリーンは、そこにただの空間を見いだし、苦笑した。

「さすがというべきか、神に近しい者たちの不思議に驚くべきか……」

いや、やめよう、と彼は自らを戒めた。

ある日突然現れた、地神神殿からの使者たちは、神職にあるとは思えぬ提案を持ち出してきた。

その内容は、紫蘭王女エーメンティアの抹殺。躊躇わなかったと言えば嘘になる。だが、ほかに道がなかったのも事実であり、結局フィデリーンはうなずかざるを得なかった。

そうして……死なせてしまった異母妹――エーメンティア。

二度と会えないのだと思うと、胸がきりきりと痛んだ。

だが、それが当然の報いであることもわかっているフィデリーンは、黙って耐えることを選んだ。

（エーメンティア……）

死んだ異母妹を思い、彼は最後の言葉をかけた。

「今度こそ、幸せな人生を……祈っているよ」

かそけき声は風に溶け、フィデリーン以外の耳に届くことはなかった。

同じころ――。

翼飛の王宮の最も奥まった一室にて、奇妙な会談が行われていた。
「頑固なやつでね。どうあってもあんたの了承なしにはうなずけないと言うんだよ」
うんざりした顔で、翼飛王太子ナストリードに告げるのは、黒髪黒瞳の、人形のように整った顔だちの少女だった。
「よっぽどあんたのことが好きらしい。引導渡すなり、説得するなりしてほしいんだけどねえ」
仮にも一国の次期統治者に対する言動ではない。
しかし、ナストリードは微笑を崩さず、平然と答えた。
「わたしの婚約者を殺した暗殺者にいったいなにを言えと？」
黒髪の少女が渋面になる。
「なるほど。立場上死ねとか死ねとか死ねとかしか言えないね。しかもあの単純坊主ときたら、あんたにそんなこと言われたら、まんま実行しそうだ」
「ええ」
と、ナストリードはうなずいた。

「だから、あなた方になんとかしていただきたいと思っているんですよ」
しわ寄せを食らわされた格好になった少女は、一気に不機嫌な面持ちとなる。
「翼飛といい、紫蘭といい、自分の不都合ばっかりこっちに押しつけて……ひとのことをなんだと思ってるんだと聞きたいね」
「なにって……神と魔の狭間にいる方でしょう？」
あまりにもあっさりと返された言葉に、黒珊瑚の使徒である少女は言葉を失った。
しかしそれも一瞬のこと。すぐに鼻白んだ顔になり、ナストリードを真っ直ぐに見つめた。
「あんたの弟は、そうは思わなかったようだけどね」
強烈な皮肉に、しかし翼飛の王太子は動じる気配も見せない。
「わたしに弟などいませんよ」
その通りだ——彼の兄弟はすべて鬼籍に名を連ねている。
「弟同然に思い可愛がっていた子供がひとり、いることにはいましたが……あの子も、もう何年も前に行方知れずになってしまった……」

南の大陸から流れてきたという、金褐色の髪と肌を持っていた女性は、その教養の深さを見込まれ、翼飛の中堅の貴族の養女に迎えられ、王宮に女官として上がった。

幼いナストリードが彼女と出会ったのは偶然にすぎなかったが、何度か会ううちに彼女の語る南の国の話に魅了され、ついには彼女を側付にするよう父王に願い出た。

それが、父の関心を引くことになるとも知らず……二年後、彼女が父親の知れぬ男児を産み落としたとき、悔しさとも切なさとも知れぬ思いが胸を満たしたことは忘れられない……。

父の名も知れぬ子供を、しかしナストリードは可愛がった。それこそ実の弟のように……否、それ以上に。だが、その子供ももういない。そうさせることを彼が選んだのだ。

だから、黒髪の使徒の言葉は的外れなものでしかない。

「なんのことだか……」

わからないと言いかけ、彼はふと思い出したように笑った。

「ですが、そうですね……わたしが以前可愛がっていた子供は、巫女であった母親の

血を濃く引き継いでいたようで、妙に勘が鋭いところがありましたよ。彼なら、予言など知らずとも、魔に近しい気配には敏感に反応したことでしょうね」

魔――否、喪月神に最も近しく危険と見なされる黒珊瑚の使徒である少女は、不快そうに眉宇をひそめた。

「……あくまで無関係を主張するってわけだ。まあ、いいけどね。関係を認めたが最後、あっちやらこっちやらそっちやらから、やいのやいのと文句が来そうだしねえ」

「なにを仰っているのかわかりませんよ。どちらにしても、王女も不届き者の刺客も死んでしまった以上、なにを言ったところで繰り言にしかなりません。それともナムラタール神殿の巫女であれば、死者をも現世に引き戻せるのでしょうか？」

ナムラタールとは死の神――だが、彼は死を贈ることはあっても、生を返すことはない。

知らぬはずもあるまいに、あえて口にする性格の屈折ぶりに、少女――カーラトーニは大仰に息を吐いた。

「……ったく、『現世』のやりかたってやつは面倒にできてるね。とてもじゃないが

ついていけないよ」

うんざりした様子を隠そうともせず、彼女は椅子から立ち上がった。

話は終わった。長居は無用だ。

（あまり後味がいいとは言えない終わり方、だけどね）

胸中でつぶやいたカーラトーニは、ふと相棒のことを思い浮かべた。

赤い髪の、血赤珊瑚の使徒である青年――彼ならこんなとき、どう反応するだろうか、と思って。

考えてはみたものの、結局しっくりくる反応を想像することはできなかった。

相互理解が足りないと、カーラトーニはしみじみ思った。

幾分かの条件の変化があったとはいえ、翼飛と紫蘭の両国間で、新たな和解がなされたのはこの数カ月後のことだった。

死亡したエーメンティアに代わり、紫蘭の王族の少女がナストリードに嫁ぐことに

なり、立太子の儀と同時に、フィデリーンは翼飛の王女のひとりと婚約の儀を執り行った。

もともと存在自体が隠されていたも同然のエーメンティアの不幸は、この二重の祝い事の前に、ほとんどかき消されたと言ってもいい。

死者とはすでに去りし者。

生ある者は、いつまでも振り返ってはいられないのだ……。

エピローグ

「まーいった！　今度という今度は、ほんとーにうんざりさせられたっ！」
紫蘭の外れ、国境に接する平原にあって、カーラトーニは顔に『うんざり』と書いて、力一杯四肢をのばして叫んでいた。
傍らには相棒のセイ――セイタマールが佇んでいる。
「王家の秘密がどうとか、血筋がどうとか、敵対勢力がどうとかっっ！　そんな面倒くさい厄介事に、勝手にひとを送りこむんじゃないっていうんだ！」
今回、得手とは言い難い問題案件に、否応もなく放りこまれたカーラトーニの怒りは大きく深い。
そんな彼女を宥めるのは、相棒である青年の務めだ。

「仕方なかろうよ。単なる国同士の争いならともかく、両国ともに神殿絡みの問題を抱えていたんだから」

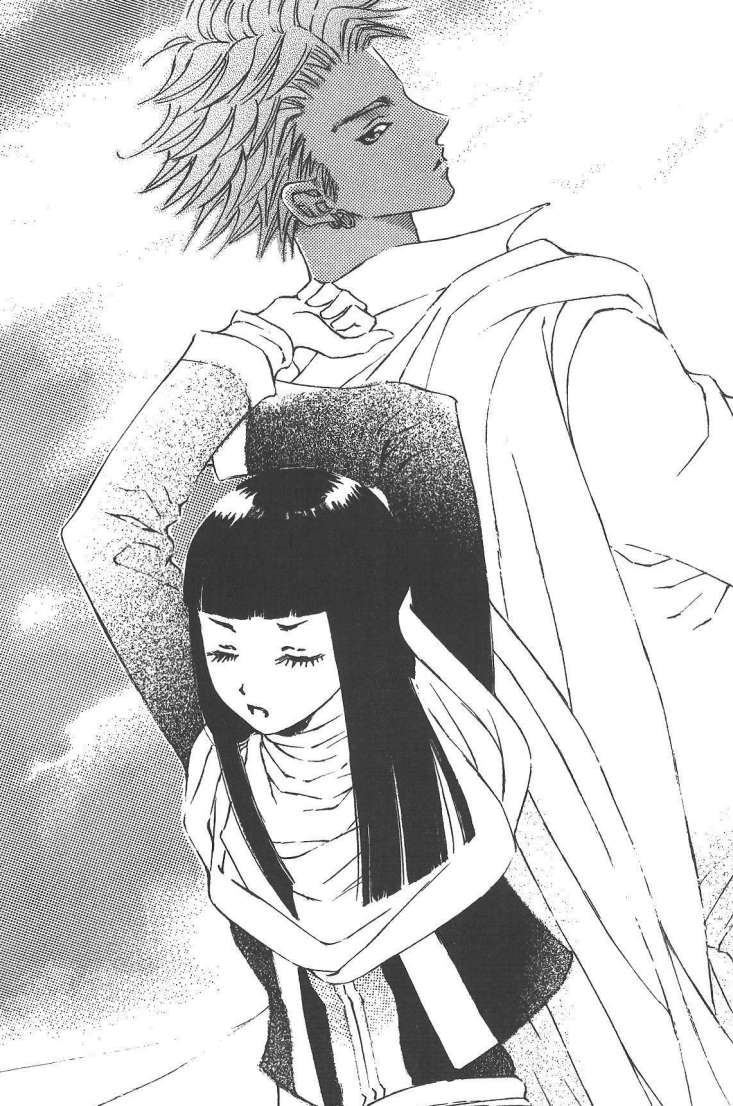
そう、誕生と同時に空神神殿の巫女により、予言そのものを歪められてしまった……しかも聖石の子供である王女。

そして、不慮の事態で海賊に攫われ、翼飛に流れ着いてしまった緋芭大陸の——当時の——次期筆頭巫女とその息子。

エーメンティアとイイオーン。人間社会においておくには、あまりにも大きな力を抱いていると思われる彼らを『現世』——あるいは俗世——から取り除くために、神殿はカーラトーニとセイタマールのふたりを派遣したのだ。

もっとも、神殿が各国間の政治に介入するのは望ましいことではない。さらにエーメンティアの『福神』説はすでに広く知られてしまっており、狙うもの多数という状況もあって、カーラトーニは髪と瞳が王女と同色であることを利用し、エーメンティアと入れ代わり、彼女の影武者を務めさえしたのだ。

他国でこっそり育てられていたこともあり、エーメンティア本人を知る者はほとん



ど皆無で、だからカーラトーニの『王女様ぶりっこ』も問題なく――なまじ彼女の外面がそれらしいことも幸いして――受け入れられていたのだが……。

イイオーンが翼飛の護衛団にまぎれていたのがまずかった。

件の予言と、翼飛の巫女が口にしたそれ――歪みと誤解が、中途半端に受け継いだ彼の巫史としての感覚を鈍らせた。喪月神に取りこまれる危険性の高い黒珊瑚の使徒であるカーラトーニを『エーメンティア』だと信じこんだ結果、彼は王女を災いだと断定してしまったのである。

おかげでずいぶん面倒が増えた。

本当なら、もっと速やかにもっと小規模で騒ぎをまとめるつもりだったというのに……と、唇を噛みしめ、悔しがるカーラトーニの肩を、相棒である青年がぽん、と叩いた。

「やり直しができるのは人間の特権だそうだ。あんまり怒るな」

「わかってても、やる瀬ない怒りってもんはあるんだよ。今回なんか特に慣れないお姫様ぶりっことかして暴れるに暴れられなかった鬱屈もあるんだから、叫ぶぐらいは

大目に見てくれってもんだ」

まったくあの半端者の厄介な勘のせいで……。

留まるところを知らぬ愚痴の大氾濫を昏からいまにも吐き出しそうだった少女は、少し離れた場所で、草原を嬉しそうに見つめて佇んでいる少女と、そのそばに立つ青年を認めた瞬間、ふっと口を噤んだ。

神殿の籍に入ったばかりのふたりは、偶然にも前の騒ぎで命を落とした紫蘭の王女と翼飛の庶出の王子と同じ外見的特徴を持っていた。もちろん、あくまで偶然にすぎない……ふたりの死亡は公に認められているのだから。

だから、そのふたりは紫蘭とも翼飛とも無関係な者たちなのだ。

カーラトーニはふたりのうち、金褐色の髪の青年に目を向けながらぽそりとつぶやいた。

「いろいろまぜっかえしてくれたもんねえ……念入りに可愛がってあげようっと」

相棒である青年は、あえて聞こえぬふりを通した。

無難な反応と言えよう。

エーメンティーニは、髪をなぶる風を心地よく感じていた。

紫水晶（むらさきずいしょう）の使徒と任じられた彼女はすでに、紫蘭の王女エーメンティアではない。つまりはその予言からも自由になっていた。

福神でも災神でもない……聖石の使徒ではあってもただの人間として、初めて感じる世界だった。

美しい世界、心地よい風、匂（にお）い……。

なにもかも、知っていたようで知らなかった新鮮なものばかりだった。

「わたし……わたしたち……」

大きく息を吸いこみながら、彼女はそばにいる青年の顔を見上げて言った。

「あの日に死んで、生まれ変わったんだわ。だから……きっとだから、こんなにも世界が綺麗（きれい）に見えるのね」

彼女の言葉に、護衛としてつくことになった金褐色の髪の青年はすぐには答えなか

った。

しばしの沈黙――そうして。

同じ事件により、出生の因縁から解放された彼はようやく言葉を返した。

「ああ……そうかもしれないな」

と。

閉ざされた世界は終わり、開かれた未来が彼らを待っていた。

世界はどれほど過酷に思えるときがあろうとも、揺りかごのようにやさしい存在であるのかもしれない。

そして、そこに眠る子供を見つめる神々の瞳は、きっとどこまでもやさしい色をたたえているに違いない。

エーメンティアとかつて呼ばれていた少女はそう思った。

晴嵐姫（せいらんき）



プロローグ

夜の帳に包まれた山中に、楽しげな笑い声がひそやかに交わされる。
くすくす、くすくす――笑うその声は若い女性のものだ。
『見て見て。久しぶりの客人だわ』
『嬉しいこと。ここ最近、誰も近づいて来なくてつまらなかったんですもの』
『あら、それはお姉さまたちが悪いのじゃないの。飽きたとたんに無造作に放り出すものだから、獣に襲われたり道に迷ったりして、無事に帰れない子が大勢でたものだから、皆用心してここに近づかなくなったのだし……』
『仕方ないだろう、客人はあくまで客人なのだから。ちゃんと返してあげなくっちゃいけない。特に乱暴にお引き取りねがったわけでなし、責められる謂われはないよ』

そうよ、そうよ、といくつもの声が唱和する。
『でも、皆ご覧なさいよ。今度の客人はとても綺麗だわ』
指摘する声に、一斉に彼女らの視線が眠る青年に向けられた。
『……本当』
『それにとても心地よい気を放ってる……』
『……眷属よ』
『違うわ！』
強く否定したのは、彼女らのなかで最も年若い少女だった。
くすくす、くすくすと、年長の女性たちが笑った。
『お馬鹿さん』
少女の無知を揶揄するように、女性たちは楽しげにつづける。
『あの若者が放つ気は、わたしたちを楽しませる……わたしたちを興じさせることができる以上、あれはわたしたちのものよ』
『そうよ、そうよ。見て、あの綺麗な顔……あれを近くで眺めるためだけでも、招く

には充分な理由とは言えなくて？』

賛成、賛成と、明るい声が重なった。

『でも……』

なおも食い下がろうとした最年少の少女の言葉を、しかし女性たちは取り合わない。

『見れば見るほど、本当に綺麗……』

『ええ、本当に』

『欲しいわ』

『欲しいわね』

別の女性が、不意に声をひそめてささやいた。

『でも、もうひとりは、いらない』

皆も口々に同意した。

『そうね、いらない』

『いらないわ』



最年長の女性が、決まりとばかりに手を打った。
『では、あの若者だけお招きしましょう』
『そうしましょう』
『素敵』
『素敵だわ』
『きっと楽しいひとときが過ごせるわ』
『もちろんそうに決まってるわ』
『もし、ここが気に入ってもらえたら、ずっと一緒にいてもらってもいいかもしれない』
あるひとりの提案に、みなこぞって賛同した。
『そうね、それはとてもいい考え』
『あの若者は、これまでの客人とは違うもの……きっと絶対飽きたりしないわ』
わあっとはしゃぐ声が上がる。
『素敵、素敵』

『そうしましょう』

すっかり盛り上がってしまった女性たちを前に、最早少女は言葉もなく黙りこんだ。

こうなってしまっては、自分ひとりでは止められないことを、彼女は経験上、イヤというほど知っていたのだ。

彼女がこのときできたのは、気づかわしげな眼差しを、なにも知らずに眠っているであろう——この山に迷いこんできたふたりの旅人に向けることのみだった。

自分たちに降りかかった災難すらも知らず、呑気にすうすうと寝息をたてているふたりの若者の内、ひとりは月の化身のような、もうひとりは太陽そのもののような、至極対照的な容姿の二人組だった……。

1

一体全体なにが起こったんだ――というのが、その朝目覚めたトリノアークの偽らざる心境だった。

記憶を、整理してみる。

幸か不幸か、稀有にして強大な力を宿す石を抱いて生まれてきたせいで、世界を破滅に導きかねない瘴気がらみの事件を解決するために、昨日は東に今日は西に、明日はもしかしたら北に明後日はもしかしなくても南に――という日々を、好むと好まざるとに関わらず、押しつけられるようになって幾星霜……とは大げさだが、短期間とは呼べないだけの時間を過ごしてきたのだ。

ちなみに今回の依頼は、バルヴァローズ七大陸中のひとつ――緋苞の中央に位置す

る国に発生した喪月神の神権回復運動の鎮圧で、かなり、けっこう手こずらされた。

喪月神の完全なる復活がなにを意味するのか、一般人は理解しておらず、それが原因で調停が長引いたといっても過言ではない。

とはいえ、真実を明かすわけにいかないと、神殿が考えるのも無理からぬことではあるのだ。喪月神の放った瘴気から世界を守るために、創世神たる女神がその身を挺したなど……いまではそれも限界に近づきつつあり、人間が招じる瘴気ひとつで、あるいは世界は闇に沈んでしまうかもしれない事実など、誰も知りたくなどないに違いないのだから。

そのぎりぎりのところで破滅をくい止める、客観的にみてかなり貧乏籤な役目を押しつけられたのが、彼トリノアークとその相棒であるナウルニールだったりするわけだ。

おかげでさんざんこき使われる。

報酬はいいが、いくら懐が温まろうと、使う暇もないのではありがたみなど感じられない。

それでも——それでも、だ。

「今回のご褒美には、それなりに満足してたし、そのおまけとしてついてきた、港街近くの温泉宿での三日間飽食のもてなしってのには、ある意味それ以上のありがたみとか感じて期待しまくってたんだぞ、畜生！」

どうしてくれるんだ、膨れ上がったこのおれの期待！

雄叫びをあげる青年——トリノアークの声は、しかし虚しく宙を震わせるだけだった。

いつもならここで、すかさず入る相棒のツッコミがなかったのも、彼の意気を消沈させていた。

「やっぱりいない……本当に、いない……」

では、これは目の錯覚でも勘違いでもないのだ。

となりに眠っていたはずの、相棒の……ナウルニールの気配が感じられない。

どこまでも遠い。

いや、存在そのものが感じられないのだ。

「どこに雲隠れしやがったんだ」

怒ったような口調になったのは、焦りのためだ。

彼が自分に黙って姿を消したことは、これまでも何度かあったが、その悉くがろくでもない厄介事絡みだったからである。

勾引かされたか、何らかの興を覚えての失跡か……どちらにしてもあまり楽しいことにはなりそうにない。

前者なら、手練であるナウルニールを攫える強敵が相手ということになるし、後者なら、興じればなにをしてもおかしくない相棒の性格が最大の障害となるからだ。

「……ろくでもねぇ……」

ぼそりとつぶやいた彼が覚えた悪い予感は、本人の希望に関係なく的中率抜群だった。

なにしろ前者と後者の合体技というとんでもない事態に巻き込まれたことを、ほどなく彼は思い知らされたのだから！

事情を知ったトリノアークはやはり、同じ言葉を繰り返した。

「……ろくでもねぇ……」

と。

ただし、その声に宿る絶望の響きは、一度目のそれとは比較にならぬほどに深く大きなものだった。

それは、ひらん、と空から降ってきたのだ。

木の上から落としたのかと、見上げてはみたものの、そばにあるのはトリノアークの肩の高さがあるかどうかという低木ばかり。

しかも開けた場所で、見渡す限り彼の『上』など空しかない。

初夏とはいえ、夜は冷えるということで、たき火は不可欠――しかしこのあたりでは一月近く雨が降っていないという空気の乾燥状態を考えて、万一にも山火事など起こさぬようにと野宿の場所を選んだのだが……どうも、これがよくなかったらしい。

（獣やら虫対策の香草はがんがんたき火で燃やしたんだがな……）

怪しい妖の面々には効果がなかったとみえる。

ふうぅ、と深い深いため息を洩らしたトリノアークだった。

空からひらんと降ってきた、ごくごく当たり前の紙片には、まごうかたなき相棒の文字がつらつらと並んでいたのだ。

『知らぬ間に、麗しい姫君方に招待され、もったいないほどの歓待を受けております。なにもかもが素晴らしく、このままでは足に根が生えそうな気配。ですがわたしのみが受けるには素晴らしすぎる恩寵と思い、親愛なるあなたと是非とも同じ喜びを味わいたく、御到着をお待ちしております』

文面をそのまま受け止めてはいけない。

かけひき云々の問題を別として、相棒である青年は、余程に切羽詰まった状況でもない限り――しかも被害にあう人物が相棒、もしくはそれに準ずる実力の持ち主であった場合――面白がって、事態を静観し、結果的に相手の力の程を確認しようとする悪癖があるのだ。

よくよく考えなければいけない局面だった。

相棒の手紙の意味するところを。

（間違っても「勾引かされたから助けに来て」とかは言いっこないやつだからなー）

判断が、難しい。

これが、敵が男であったなら、文面がどうであろうと、無理やり勾引かされたこと決定として、思い切った行動に出ることも可能なのだが……いかんせん、『姫君』という言葉が引っかかる。

彼の相棒であるナウルニールは——本人至極不本意らしいが——普通に歩いていても男装の美女と間違われるほどの……柔和な雰囲気の美形なのだ。

が。

その性質はあくまで正常、容姿に起因する幼少時の心的外傷もあってか、潔癖なまでに男嫌いの女好きを誇っている。

だからといって、女性にいっさいひどいことができないわけでもないのだが、自分のことを男性と認めてくれた相手に対して、かなり甘くなることは否めない。

そうしたことを知っているからこそ、トリノアークとしては悩んでしまうのだ。
（相手が妖でも、たとえ無理やり攫った相手でも、よほどのことでもない限り、あいつってばおれと同じく女性の味方だしなあ……）
結局のところ、問題となるのは、文にこめられた相手の真意だ。
（一緒に楽しく遊びましょうよってなことで間違いはないだろうが、問題はその内容だよなァ）
遊ぶ内容によって、意味は大きく違ってくる。
そうして、相棒の性格を考えれば、だ。
（……平和的に楽しくってな線じゃあ、ないんだろうな、多分）
そうしたつもりなら、文面はもっと挑発的なものとなったはずだ。
例えば『羨ましくはありませんか？』ぐらいの文句は入っていなければおかしい。
そこから推測するなら、妖しくて怪しい女性陣に、知らぬ間に拉致られたから、頑張って自分を探してほしい――とでも言うところか。
自力による脱出がどれほど困難なのかは知らないが、待遇は……恐らく、悪くはな

いと見た。そうでなければ、あの相棒がこんな悠長な手紙を認めるはずがない。逆に酷い目に合わされているなら、そこでわざわざ自分を誘うための手紙を書くわけもなく、つまるところ、「見ているから、さっさと楽しく迎えに来なさい」という意味合いが強いと思われる。

（ああ、温泉と歓楽街の綺麗どころの姐さんたちが待ってたはずなのに……なんだってこんな厄介なことに……）

相棒を見捨てるつもりなど皆無のトリノアークの決断は早かったが、恨みがましい思いを抱かずにおれぬのも事実だった。

そんな彼の心中を読み取ったかのように、二枚目の手紙がひらん、と降ってきた。以心伝心としか思えぬ言葉が、それには綴られていた。

『そう思うなら、早々に行動なさい。なお刻限は明日の夜明けということです』

まったくありがたくないトリノアークの一日は、こうして始まったのである。

2

世の中には二種類の人間がいる。

すなわち、危険な状況を楽しめる者かそうでない者か、だ。

前者は時に勇敢と讃えられ、時に蛮勇と貶される。

後者もやはり時に臆病者と誇られ、時に用心深いと褒められる。

だが、真の意味で危地を乗り越える強者には、この両方の資質が不可欠なのだ。臆病なまでの細心さは、無駄な危険から身を守る楯となり、危険と知りつつ前進する勇気は、活路を開く剣となる。

もっとも、いくら双方を兼ね備えていようとも、実力と運がなければ『絵に描いた餅』で終わるのが関の山なのだが――。

幸か不幸か、トリノアークはその四つを持つ稀有な存在だった。

おかげ、で――だ。

ひらん、とどこからか落ちてきた紙片に綴られた内容を目にしても、真剣に怒る気が起こらないという、困った状況が生じてしまっていた。

そこに記された内容はと言えば――。

『お前みたいな筋肉ダルマ、興味もないけれど、綺麗な客人のたっての願いだから、機会を与えてあげる』

感謝しなさいと言わんばかりの文面の後半は、事細かい場所の指定で埋まっていた。

行け、もしくは来い、ということだろう。

(ひとの相棒勾引かしといて、なんて偉そうな連中なんだ……)

ため息まじりに荷物をまとめながら、トリノアークはがっくりと肩を落とした。

彼を本当に脱力させたのは、誘拐犯たちからの文の内容ではなく、余白に走り書きされた相棒の短いコメントだったりした。

『山荘における待遇は素晴らしいの一語に尽きます。あなたが辿りつけたら、同様の恩恵を約束していただきましたから、ぜひともここは頑張ってくださいね♡』

相棒はなにもせず、まんまと快適な山荘生活を満喫し、一方自分は苦労して、しかも恐らくはたやすくはないだろう条件をクリアしなければ、同じところには辿りつけないらしい……この扱いの差はなんだと言うのか。

不条理を感じたものの、トリノアークはここは忍の一字、と心に刻んだ。

人外の存在を相手に、人間の理屈を通そうとしても無意味であることを、すでに彼は学習済みであったためと……『挑まれれば、やる！』が身に染みついていたせいである。

「……まったく、あいつときたら、いつも偉そうなことばかり口にしやがるくせに、こんなにあっさりと攫われやがったりして……」

ぼやく口元が、ひくひくと震えていた。

「本当に仕方ないやつだ……。でもまあ、そういうやつだってことはわかってたことだからな、仕方ないからフォローしてやるか」

仕方ないを連発するトリノアークの青い双眸には、なぜだか嬉しそうな光が宿っていたりした。

「ほんっと、あいつときたら、おれがいなきゃ駄目なんだからなあ！」

客観的視野に立った場合、その主張が認められるかどうかは別問題として、このとき彼はすっかりやる気になっていた。

温泉三昧の日々や綺麗で好みの女性陣に囲まれての至福の日々――とはまた別の意味での、爽快感満喫できる対象を、このとき彼は見いだしていたのである。

「ふ、ふふふ……待ってろよ、ナニィ！」

やる気満々で、彼は叫んだ。

そのまま、紙片に記されていた場所へと向かう彼の脳裏には、実のところふたつのことしか刻まれてはいなかった。

すなわち、ほんのとなりに眠っていたはずの相棒を、まんまと勾引かされたことに対する苛立ちと、なかなか最近ではかなわない、能力全開発揮への期待だった。

（相手が人間じゃないんなら、思い切りぶっ飛ばしたところで神殿の爺どもから文句

つけられる筋合いないしー、たとえ後で問題になったところで、相棒人質に取られてたってことで、情状酌量の余地ありまくりだしー）

ストレス続きの万年青年は、この際このアクシデントを、とことん都合よく利用するつもりになっていた。

紙片には、ご丁寧に地図まで書いてあった。

文面を思い出すまでもなく、これが相手の親切心の現れなどと思うほど、トリノアークもめでたい性格はしていない。

（十中八九、罠だらけってことだよな）

まあ、それはそれで楽しめそうだと思うあたり、彼もなかなかな神経の持ち主と言えるわけだが、ほかに手がないというのも現実だった。

なんといってもトリノアークには――相棒のナウルニールもそうだが――妖気や瘴

気の流れをたどるといった資質が綺麗に欠けているのである。当然のことながら、それでは仕事に差し支えるわけで、いつも最寄りの神殿から、感知能力の高い使徒を一時的に借り受けることになる。

本来なら、正式にもうひとりチームに迎えたほうがいいのだが、いかんせん、彼らふたりが気に入ったとしても、相手にふられる事態ばかりがつづいている。情けない話だが、一、二回組んだところで、必ず「次回からは遠慮させていただきます」と言われてしまうのだ。

さすがにそれが、片手の指では数えきれないぐらいになったころには、ふたりとも恒久的な『三人目』は諦める気になった。気に入った相手にふられつづけるのは、いかに図太い神経の主であろうと、あまり心楽しいことではないからだ。

そういうわけで、今回の仕事も、二日前に出立した街の神殿から水晶の使徒である青年をひとり借り受けて片づけた。感知能力だけが取り柄と言えないこともない青年だったが、昔から視たくもないモノばかり視つづけてきたせいか、臆病なところがあり、仕事が終わるなり逃げるように神殿に戻ってしまったのだ。

それほど恐ろしい思いを味わわせたつもりはなかったのだが、仕事が片づいたとき、自分たちを見る目に脅えの色が浮かんでいたのはどういうことだったのか……。

あまり珍しくはないことだったので、いまさら気にしたりはしなかったのだが、ここに来て、彼をあっさり解放してしまったことを、少しばかり後悔していた。

青年の感知能力があれば、ナウルニール探索の役に立ったに違いないことを確信しているせいである。

（あー、こんなことなら、もうちっと強引にでも温泉に誘うんだったかなー？　初対面のときはナニィに見とれてたんだし、あいつがもう少し熱心に誘ってたら、もしかしたらついてきてたんじゃないかなー？）

相棒の性別不詳の――中性的というよりは両性的な美貌は、他者の好意を勝ち取る場合大変な効果を発揮する。

美しいものを嫌いな人間はあまりおらず、ときおり中身の剣呑さに気づかず、困った手合いが困った手出しをしてくれることを除けば、彼の顔とやわらかな物腰は、大変重宝する武器だった。

「あそこでもう一押ししてりゃ、もしかしたら……」

とつぶやきかけたトリノアークは、不意に無意味さに気づき、口をつぐんだ。

勝負事に関わらず、過去を仮定しても始まらないことは動かしがたい真理だ。振り返り、後悔したり反省することは時に大事だが、いまはそのときではない。

（いてくれりゃあ、そりゃあ便利だったろうが……なにごとも面倒くさがっちゃいかんよな、やっぱり）

たとえ目の前に広がるのが、罠盛り沢山の難所だとしても、だ。

楽しいことだけつまみ食いできるほど、世間は甘くないということか。

「……ま、それなりに楽しそうだから、いっか」

ぼそりとつぶやき、トリノアークはがしがしと金色の頭を掻いた。

鬱蒼とした山のなか、目印だけを頼りに、目的地へと到達するのはなかなか難しそうだと思いながら……あまり、方向感覚に優れているとは言い難い青年は、しかめっ面で地図と向き合った。

『あらあら、やる気満々だわ』

薄皮一枚隔てられた、異界の片隅で、くすくす笑う声が響く。

『本当……あっさりあきらめるとばかり思っていたのに』

『そうよね、あんなに仲が悪そうだったのに……』

白い女性たちが、口々に意外そうな声を上げる。

白い髪、白い衣、透けるような白い肌――ただ唇だけが淡い紅色をたたえている。

もし感覚の鋭い人間が見れば、一目で人外の存在だとわかるだろう。色彩が問題なのではない、気配そのものが人間のそれとは大きく違っているのだ。

菫色の瞳をきらめかせながら、女性たちは風が運んでくる映像に見入っていた。

そのうちのひとりが、拗ねたような口調でつぶやいた。

『つまらない。こんなことなら、客人との賭けになんか乗るんじゃなかったわ』

『あら、それは早計じゃない？　まだあの男が辿り着けると決まったわけでもないの

だもの』

　別のひとりがそうそう、とうなずいた。

『うーんと怖い目にあえば、あきらめてくれるかもしれないじゃない？　そうしたら客人だって、納得してくれるに違いないわ』

『もちろんだわ。だって賭けを持ち出したのは客人のほうなんですもの！　言霊にかけて！　約束は守ってくれるはずだわ』

　いつも通り『迅速』に、ここに招待した客人は、彼女たちの手厚いもてなしに、微笑みながら賭けを提案してきたのだから。

　自分が負けたら、彼女たちが望むだけ、ここに滞在しつづける、と――。逆の条件も提示されたのだが、彼女たちは魅力的な勝利の報酬ゆえに、一も二もなく飛びついたのだ。はなから負けるはずがないという思いがあったのも否めない。なにしろこれまで、似たようなことで負けたことがないのだから。

　多少腕がたつだけの、気配ひとつ読み解けぬ男などが、ここに辿り着けるはずがない。あの客人は自分たちのものなのだ。

彼女たちはそう信じて疑わない——ごく一部を除いては。

『一の姉さま、いつからそのように心配性になられたの？』

『そうそう、心配なさることはありませんわ。見てご覧なさい、わたしたちの仕掛けた罠にも気づかずに、あのようにずかずかと……』

金髪の男性が、無造作に歩く姿を風が運んでくる。

一の姉さまと呼ばれた女性は、それでもなぜか浮かない顔で首をかしげた。

『それはそうだと思うのだけれど……大丈夫だとは思うのだけど……』

『そういうのを、人間は杞憂と呼ぶのですってよ』

三の妹に当たる女性の言葉に、彼女は曖昧にうなずいた。

無理やり納得したような、不自然な表情は、しかしすぐに興奮したそれに取って代わられた。

見せ物が、始まったのだ。

3

指定された橋を見たとき、いやーな予感はしたのだ。

強風に煽られ、ぎしぎしと音をたてながら揺れる吊り橋は、お世辞にも新しいものには思えず、しかもきちんとこまめな補強がなされているようにも見えなかった。

（渡ってる最中にぶちっとかって……いかにもありそうな……）

とは思ったが、地図を見る限り、この橋を渡らないことには、次なる指定場所には行き着けないらしい――となれば、渡るより外にない。

あるかどうかもわからない迂回路を捜す時間はないのだから仕方ない。

幸いトリノアークは高所恐怖症の気はない。決断した後は、迷うことなく足を踏み出した。傷んだ蔦に負担をかけぬよう、気をつけつつとはいえ、長身の青年はあっと

言う間に橋の半ばに到達した。

が――。

やはりというべきか、お約束というべきか――そのとき、ひときわ強い風が吹き、トリノアークはバランスを崩し、慌てて蔦にしがみついた。

その体重移動がまずかったのか、ぶつり、と不吉な音とともに、傷んだ蔦の何本かが切れ、吊り橋は橋とは呼べぬ代物になってしまった。

「げっ！」

このままでは下の川に真っ逆様だ――という状況で、トリノアークは念のために用意し口に含んでおいた菫青石を口から取り出し、天高くかざし、叫んだ！

「風霊！　頼む！　渡り切るまで、この橋下から支えといてくれっ！」

聖石の子供石中、青や紫の色目のものは、木性である風霊が特に好むものである。彼がかざした菫青石も、そのひとつだった。困ったときに備えて、いくつか懐に持っていたのが幸いした。

ちなみに、大半の石はナウルニールの管理下に置かれている。遊ぶ金欲しさに、簡



単に換金しかねないトリノアークの性格を知っての役割分担であるが、危急の際を想定し、いくつかは懐にしまいこんでいたのだ。

菫青石の御利益は素晴らしく、落下寸前だった橋は、下から吹き上げる強風のおかげでほんの少しの間、重力から解放された状態になった。

あとは――ダッシュである。

トリノアークは必死に吊り橋の向こう側を目指し、一気に駆け抜けた。

どこかで誰かが舌打ちしたような気がした。

一難去ってまた一難。

遠い目をして、トリノアークはつぶやいた。

「今度は文字通りの茨道(いばら)かよ……」

指定された場所で、またしてもひらん、と落ちてきた紙片に書かれた地図を頼り

に、山のぐるりを歩き回された彼は、げんなりして肩を落とした。

目の前に広がるのは、道などない茨の茂みだ。

しかし、地図を信じるなら、ここを突っ切らないことには終着点には辿り着けないということで……つまり、切り開いて進む以外にないというわけだ。

体力には自信があるものの、朝からずっとの強行軍で、さすがに空腹及び疲労感など覚えていた矢先のこの光景だ。かなり……けっこううんざりしてきた。なにしろ件の吊り橋のあとも、獣道やら崖沿いのごくごく細い、しかも崩れやすい道など、まともな道がなかったのだ。

それでも律儀に指示通りに進んできたのは、気配を辿って風霊に連れて行ってもらうことができなかったのと、相手方に後々付け入られたりしないため、だった。

人外の存在を相手にするときには――精霊にしろ妖の類いにしろ――言葉の使い方に細心の注意を払う必要があることを、トリノアークは知っている。

殊に妖や瘴気絡みで歪みを帯びたモノたちは、受け取り方、もしくは解釈次第で内容に裏の意味を持たせ、罠に用いることが珍しくない。

もしトリノアークが風霊に頼み――実は、温泉街で遊ぶため、換金可能な聖石の子供石が、懐にはいくらか入っているのだ――楽して目的地に辿り着けたとしても、「自分の足で移動したわけではないから失格」とか言われかねない。

とはいえ、そろそろ彼の我慢も限界に近づきつつあった。

なにに対してかといえば、ひたすら体力勝負――もちろん、反射神経や咄嗟の機転も要求されてはいたのだが――三昧の試練の内容に、だ。

（つまらん）

というのが、トリノアークの本音だった。

せっかく力全開ばりばりで、大暴れできるかと期待……もとい、覚悟を決めていたというのに、この軍事教練もどきな指示は何事なのか。

おまけに、この茨の茂み――。真っ直ぐ突っ切るだけの道を作るだけでも、まっとうにやっていたら、到底日暮れまでには終わりそうにない。

「……つまり、向こうははなからあいつを返す気はないってこったな」

いや、うすうすそうではないかとは思っていたのだが……それでも確信できてしま

う事態というのはいただけない。
相手が正攻法でくる限りは、こちらもそう対応しようと思っていたのだが、忍耐ももはや限界だ。
（ま、いいか。どうせ先に仕掛けてきたのはあっちなんだし）
瘴気に関わること以外では、極力使徒としての力をふるわないよう、定められている身でありながら、トリノアークの決断は早く、その際逡巡することもなかった。
すらりと腰から剣を抜き放ち、彼は眼前の茨の茂みに向かって、力一杯横薙ぎに振るった！
青玉と紅玉の子供石が、柄や刀身に嵌めこまれた彼の大剣には、通常の剣にはない、しかも尋常ならざる力が宿っている。その正当なる使い手であるトリノアークの全力の一薙ぎは……当然のことながら、凄まじいまでの威力を発揮した。
互いに絡み合い、より堅固な檻にも似た状態をさらしていた茨は、ほんの一瞬で、彼の視界から消え失せた。力そのものによって粉砕され、高く宙に舞った茨であったもののかけらは、風に乗り、どこまでも流されることだろう。

余談だが、この山を中心に、徒歩にして三日ほどの半径の範囲に、突然茨の雨が降るという異常事態が生じたという証言が数多く残されたという。

あまりに異常な事態に、神殿側は使徒の派遣を検討したとかしないとか……最終的には、記録そのものがいつのまにか削除されていたのだとか。

……人々の心の支え、神の代弁者たる神殿としては当然の処置と言えたろう。

まあ、それはさておき、だ。

すっかり見晴らしのよくなった元茨道を、満足げに見つめるトリノアークの矢車菊の双眸には、まぎれもない期待の色が浮かんでいた。

宣戦布告完了。

気分は「さあ、どこからでもかかってこい！」である。

細心の注意など、すでに彼の脳裏からは吹き飛んでいる。

こうなったら力ずく――後々の微調整は、どうせ相棒がやるだろうと、ある種の問題を丸投げし、彼はうきうきしながら戦闘状態に移行した。

色めき立ったのは、この一部始終を目にしていた女性たちだった。
集まっていた彼女たちは、人間なら頬を紅潮させたであろう怒りを露にした表情で、口々に男に対する罵倒語をくり出した。
「なに!?　なんなの、あの力！　反則じゃない！」
「そうよ、そうよ！　さっきだって菫青石使って！　だいたいどこの誰よ、あんな餌にほいほい釣られてあんなやつに力貸したやつ！」
こぶしを握りしめながら、怒り満面で叫ぶ女性の瞳には、けれどなにかを惜しむような光が浮かんでいる。
どうせなら、自分が欲しかったとでも言わんばかりのそれに、しかし追及の手を向ける者はいない。
「反故よ、反故！　あんな力使ってもいいだなんて約束の内に入ってないわ！　賭けはこの時点で終わりにすべきだわ！」

そうよ、そうだわ——という声が重なる。
それを制したのは、穏やかな——青年の声だった。
「反故？　なぜです？」
部屋の最奥——それはそれは豪奢な長椅子に、半ば身を横たえた格好で、今回の麗しい客人が寛いでいた。
白とも銀ともつかぬ髪、性の毒々しさを持たぬ整った容貌、病的ではないが、透けるような白さを誇る肌——彼は、ある一点を除き、ここの主である女性たちによく似ていた。
そしてその違う一点ゆえに、彼女たちは彼を陶然たる目で見つめるのだ。
その、鳩の血色の双眸ゆえに。
「まぁぁ、だって、賭けの条件で決めていたじゃない、自力で辿り着いたならって」
「そうよ。そういう意味ではあの男は最初から失格だわ。だって、菫青石を餌に他者の力を借りたのですもの」
室内にいる女性がうんうんとうなずいた。



「失格！」
「失格！」
「失格！」
失格コールである。
しかし客人は退かず、再度の問いを放った。
「なぜです？　賭けの条件を決める際、彼自身の持ち物や能力を用いることは実力内と認める趣旨、皆さん受け入れられたことと思いますが？」
一瞬、沈黙がその場を支配した。
「そ……それはだって、食事も取らずに動き回るのは、さすがに体力自慢の男でも難しいから認めてほしいとあなたが……」
言ったから――とまで言わせずに、客人は優雅に微笑んだ。
「ですが、剣の使用も許可していただきましたよ？」
眼福そのものの笑顔を前に、うっかり見とれてしまった女性陣のなか、気の強いひとりが自分を取り戻し、叫んだ。

「それもあなたが言ったんじゃない！　山中には獣も出没するし、そうでなくとも戦士にとって、剣は自らの体の一部も同然なのだから、使うなというのは無茶だって！」

だから、彼の帯剣も許した。

「あと、怪我したときに備えて、薬効のある品の所持も認めていただきましたっけ」

「ええ、もちろんそれも覚えているわ。あなたときたら、本当に細かくて……」

そう答えかけた『一の姉』の表情が凍りついた。

「……まさか」

つぶやく言葉はかすれかけていた。

「聖石の子供石は、ある種の人間にとっては薬湯の材料になる。もちろん、彼が持っていた菫青石もね。その使い方の限定までは条件には入ってなかったから、彼が条件を破ったことにはなりませんよね」

にこにこにっこり――彼をよく知る一部の面々が、密かにある種の笑顔を恐怖でもって見守るしかない事態に陥ることを、このとき彼女らは実感したかもしれない。

「……最初から、そのつもりだったのね!?」

彼の思惑にまんまと乗せられたことに気づいた女性が、憎々しげに青年を睨めつけた。

だが、そんなものに怯む可愛げは、青年にはない。

「なにがです？　彼は実力であなた方の指示通りに進んできましたよ？　これまでの相手のようにたやすく退けられなかったのは、わたしや彼のせいではないでしょう？」

邪気のなさそうな笑顔のなかで、真紅の双眸に浮かぶ光だけが、その雰囲気を裏切っていた。

非常にひとの悪い、意地悪いそれをたたえた青年は、憎らしいことこの上ないというのに……それでも見とれてしまう魅力に溢れていた。

あの男がここに辿り着いたら、この青年は帰ってしまう。これまで、この青年ほど心惹かれる人間に出会ったことはないというのに！

（行かせるものですか……そうよ、あの男さえいなくなれば、彼はここに留まるはず

なんですもの！）

人外の姉妹たちの思いは、すぐにひとつになった。

「まだよ！　まだ、あの男はここに辿り着いていないわ！」

そうして、彼女らの思いは決意を結び、力となった。

邪魔者を抹殺（まっさつ）するための――妖の力に。

「嘘（うそ）だろ」

まぎれもなく本気で、トリノアークはつぶやいた。

視界いっぱいの茨を切り散らした後のこと――地響きをたて、周囲のありようが一変したのを目にした身としては、無理はない反応だった。

邪魔くさい茨が消えた後、そこには新たな障害物がどすどすと出現してくれたわけである。

それを、いったいどう表現するべきか――。

なにもなかったはずの大地から樹木が生え育ち、しかも尋常ならざる速度で成長し、トリノアークをからめ捕り、土中に沈めようとする。

自然ではあり得ない状況である。

(山全体を支配する妖かよ!?)

そんな大物が潜んでいるなどと、聞いた覚えはない。

いや、と緊急時にも関わらず、トリノアークは頭を働かせた。

(あの水晶の野郎……確か途中まではけっこう乗り気じゃなかったか？　それが、この山越えると聞いた途端に……そうだ、やっぱり遠慮するとか言い出して……!)

つまりは、地元では有名な出来事だったのだ、この手の勾引かしは。

だから、急に態度を変えた。

そのくせ、こちらに危険を知らせることなく送り出したということは――勝手にこちらが巻きこまれた挙句に、この山で起こっている妖異を片づけてくれたら万々歳という思惑ありありだったからに違いない。

（きったね……）

とは思いながらも、あまりあれこれ考えてられる状況でなかったことも幸いし、トリノアークはひとつ息を吸った。

「ま、誰がどんな思惑抱いて動こうと、知ったこっちゃないわけだしな。早い話、おれとしては、だ」

いったん言葉を切り、巨大化した上増殖を果たし、さらには自分を押しつぶすべく襲いかかってくるモノ悉くを、彼は自らの愛剣で薙ぎ払った！

朱炎が周囲を覆い尽くしたのは、その瞬間のことだった。

「をい？」

自分は決してイイタールの息子――火神の名付け児ではなかったはずなのだが、と首をかしげるトリノアークをよそに、彼の剣から放たれた炎は、見る間に山を覆っていく。

「きゃあぁぁぁぁっっっ！」

複数の、女性の悲鳴が、聞こえたような気もしたが……確かではない。

「ええっと……どうしたもんかな？」
「どうするもこうするもないでしょう」
意図せずして山火事を起こしてしまったくせに、まったくその自覚なく、しかも対処法に通じてもいなかった男を救ったのは、突然宙から現れた、勾引かされたとばかり思っていた相棒の厳しい声だった。
べしん、と頭をぶったたかれた。
「っってぇー！」
なにすんだ!?
と、叫びながら振り返ったトリノアークは、不意に戻ってきた相棒の姿を目にし、一瞬信じられないという顔をした。
「……まじ……？」
相棒の青年は、にこにこにっこりの——彼をよく知る人間にとっては恐怖の対象となる笑顔で応じた。
「ここの気が、あまりにわたしたちと相性よすぎたせいで、火神の名付け児でもない

あなたが火を放ってしまっちゃったんですよね。ここに住んでるお嬢さま方にお仕置きする意味ではちょうどよかったと言えなくはない事態でしたけど……」

でも、山ひとつ焼き尽くしてしまうのは、やっぱりやりすぎだと思うので――と、告げ、ナウルニールはにっこり笑いながら、トリノアークの鳩尾にこぶしを見舞った。

「ちょっと、大人しくしててくださいね。なにしろあなたが起きてる限り、水霊を呼んでも効果半減になっちゃいそうですから」

……究極の事後承諾に、もちろんしっかりキめられてしまったトリノアークが反論できるはずもない。

力なく、その場に崩れ落ちた彼の体を、しっかりと支えながらナウルニールは宙に向かって話しかけた――視えぬ身でありながら、その存在を確信した眼差しで。

「……これで、よろしかったでしょうか、晴嵐の末の姫君？」

その声に応えるように、空中から煙の化身のような少女が出現した。

姉姫たちと同様の白い肌と髪、そして菫色の瞳を持つ「誘拐犯」たちの末妹は、こ

くりとうなずいた。

姉姫たちが、躍起になってトリノアークの排除に力を結集させているなか、そっとナウルニールをあの屋敷から連れ出してくれたのが、この少女だった。

このままでは山が燃え尽きてしまいかねないから、と……そして意図したわけではなくとも、結果的に山に火を放ってしまったトリノアークのことを、姉姫たちは決して許しはしないだろうから、と……そのふたつの理由から。

もうひとつ、理由があることを、ナウルニールは気づいたが、それは知らぬ顔をすることに決めた。これ以上ややこしい事情を抱きこむのは御免だったのと、暴いたところで自分にとって一文の得にもならないと判断したからである。

あらゆる意味において、彼は損得勘定を忘れない人間だった。

だから、この機会を見逃すことも、彼はしなかった。

ふわりと微笑み——なまじ人間離れした美貌なだけに、優しげな笑顔の効果は大きいのだ——未だ幼さの目立つ外見の少女に、こう告げた。

「ならば、末の姫君。あなたはしばらく、ここから離れていたほうがいいでしょう。

わたしたちと接触したことは、くれぐれも姉君たちには内緒にしておかれますよう……後になってあなたが責められることになってはいけませんからね」

そう告げられた少女は、難色を示したが、結局はナウルニールの言葉に従った。

その後、彼女の「姉姫」たちとナウルニールの間で、いかなるやりとりがなされたのかは……わからない。

ただ、山火事は治まり、その山における「神隠し」も、ある時期を境にぴたりとなくなったという事実だけが、ひとの心に刻まれたわけである……。

エピローグ

麓の街の、宿屋で目を覚ましたトリノアークが問いかけるのに対し、攫われたはずなのに、ちゃっかり自力で戻ってきた彼の相棒はけろんとした顔で応じた。

「……で？」

「で、とは？」

いつもであれば誤魔化されてお終いになりそうな展開だったが、鳩尾にきつい一発を食らった挙句、昏倒した記憶のある万年青年は譲らない。

「とぼけるな！　お前、おれの鳩尾に一発食らわせて、おれが意識なくしてる間にあの誘拐犯らと、なんか取り引きしただろう!?」

「えー？」

意外そうな声を上げる相棒の様子に、これはすっかり白をきるつもりなんだな、とあたりをつけたトリノアークは……数秒後、がっくりと肩を落とす羽目に陥った。

なぜなら、その裏事情に関しては、隠し通す方向で動くだろうと確信していた相棒が、全然逆の方向に動いたことを知ったからである。

「やだなあ、人聞きの悪い……」

くすくす笑いながら、ナウルニールはあっさりと種をばらした。

「この地に集うは晴嵐姫……風霊でありながらこの地……この山と深く絆で結ばれた存在でしたから。好き勝手やっても、誰も不平も不満も口に出したりしなかったんでしょうねえ……」

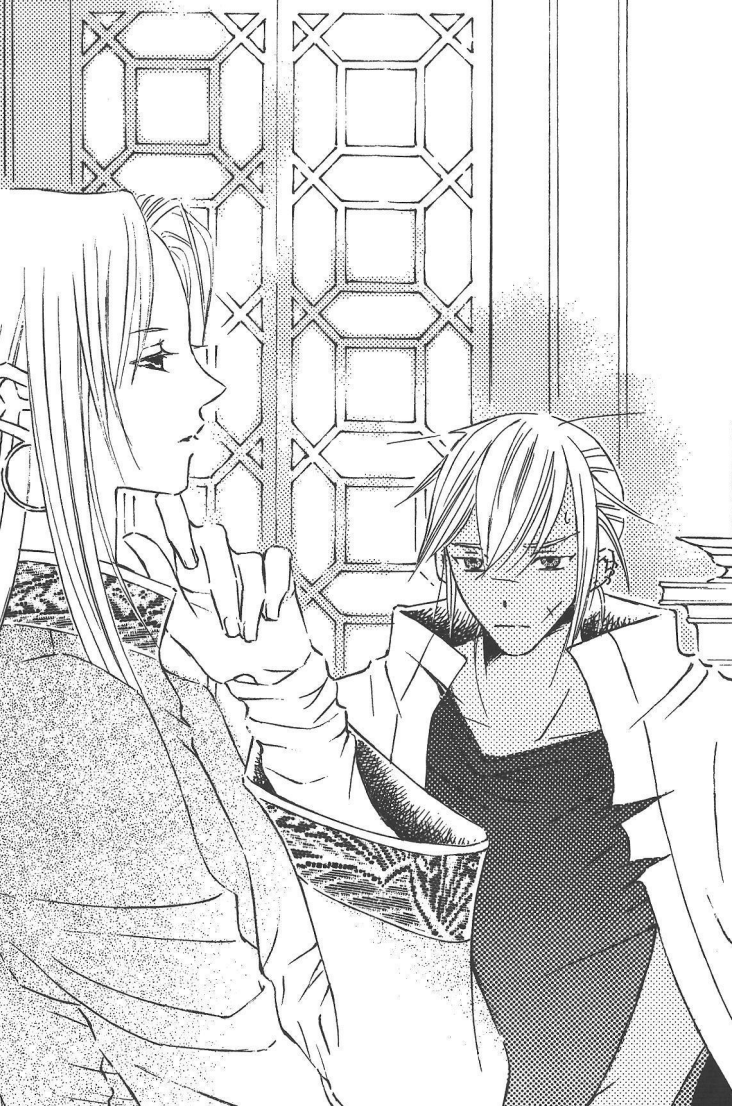
うんざりしつつ、トリノアークは応じた。

「神隠しはつまり……？」

「彼女らの気まぐれでしょうね」

あっさり答えるナウルニールに、トリノアークは胡乱なものを見るような目を向け、ずばりと尋ねた。

「……それで、いったいどんな裏取り引きをしたわけだ？」
言葉の悪さに、真紅の目を持つ青年が眉宇をひそめる。
「ひどい言いようですね。裏もなにも、取り引きなんてしてませんよ。真心をこめてお願いしただけです」
（……こいつの、真心をこめたお願い……）
なんとなく、これ以上は聞きたくないような気もしたが、聞かずにすますのも落ち着かないので、そろりと訊いてしまった。
「……具体的には、どんな……？」
「ですから、もう気に入ったからって、無理やり勾引かすような真似はしないでくださいね、と」
「……大人しく、その女性陣は約束してくれたのか……？」
そんなはずはあるまいと、確信できるだけに、問いを重ねるのは虚しかった。
だが、相棒がなにをしでかしたのか、把握しておかなければ、後々困った事態に巻きこまれるかもしれない以上、是非もない。



「……まあ」

少し間があいたことが、なによりの答えだった。

「多少聞き分けのよろしくない方々がいたのは確かですが……でも、大丈夫ですよ。なんなら今度知りあいのイイタールの娘を連れて来ましょうか、と言った途端、皆さん素直にうなずいてくださいましたから」

「……それは脅したってことじゃないのか？」

風霊であり、同時に山の気も帯びた晴嵐姫たちにとって、火神の名付け児にして強大なる炎を操る存在は、脅威でしかない——風は火を助けるのだから。

イイタールの名付け児でないトリノアークですら、あれほどの炎を生み出すことができたのだ、もし正真正銘のイイタールの娘が、力を解放しようものなら……酷い目にしかあわされていないにも関わらず、なにやら少しばかり、晴嵐姫たちが気の毒になってしまったトリノアークだった。

だが、彼はこの外見からは想像もできないぐらい物騒な性格の青年の相棒だった。出会い、組むようになって久しい。

その最たる証拠が――。

「まあ、いいじゃありませんか。おかげで、怪我の治療も兼ねて、温泉宿で十日も優雅に過ごせるんですから」

との相棒の言葉を耳にした瞬間、彼の心からは、泣き寝入りする羽目になった人外の女性たちへの同情はすっかり消失してしまったことだ。

「あ？　日数が合わないんじゃないか？　確か先の約束では……」

三日だったはず――と、つづけようとしたトリノアークに向かい、ナウルニールは凶悪なまでに晴々とした、目に楽しい笑顔で応じたのである。

「その予定だったんですが、先の神殿に任務終了の報告に行きました際、相談を持ちかけられまして。彼女たちは面食いなだけでなく、自分たちと同じ木気や自分たちを助けてくれる水気を強く持つ者を選んで誘拐してたそうなんです。神殿のほうでも蛍石や紫水晶や杉石や黒瑪瑙や月長石の使徒や使徒候補の子供たちが、かなり被害にあってたらしく……もしこの問題を片づけてもらえるなら、礼は惜しまないとまで言われたものですから……まあ、たまには飽きて退屈するまで、温泉三昧もいいのではな

いかと思ったわけです。しかもよほどに困っておいでだったのか、わたしがなにも言い出さない内から、費用は神殿が持つ、とまでおっしゃられて。……ですが」

と、ナウルニールはここでわざとらしく言葉を切って、トリノアークの顔を覗き込んできた。

「余計な真似、でしたか？」

トリノアークの理想とする美貌に加え、最初の予定より一週間も長い、しかも全費用神殿持ちの温泉街での休暇――。

この瞬間、トリノアークは自分が殺されかけたことも、相棒から鳩尾にきつい一発を食らったことも、どうでもよくなった。

「とんでもない！」

ぶんぶんとかぶりをふり、彼は相棒の手腕を褒めたたえた。

「や、さすがナニィだっっ！　いい相棒を持てて、おれは幸せものだ！」

過ぎたことには拘らない大雑把な性格が、あるいは剣呑すぎる人物を相棒にして、うまくやっていくための不可欠の条件なのかもしれない。

そうして――そんなトリノアークだからこそ、決して気づかないことが、ひとつ。

彼らが泊まっている宿の上空に、山を離れた晴嵐姫の姿があった。ナウルニールに末の姫と呼ばれた少女は、切ない目をしてトリノアークを視ていた。

その肩に軽く触れ、彼女の意識を引き戻したのは、最年長の晴嵐姫――一の姉、あるいは一の姫と呼ばれる存在だった。

「もう、気は済んだだろう？　わたくしたちは、もうあの男に危害を加えない……加えることはできない。だから、戻っておいで。火気を強く持つあの男に、お前が惹かれるのは無理もないこと……けれど、わたくしたちは山気をも帯びたものだもの。山を滅ぼす火気に靡いてはいけない……あれは決して我らのものにはならない」

諭す長姉の言葉に、少女は声もなくほろほろと涙を流した。

その涙の一粒は樹木の種子となり、また別の一粒は大地を祝福する力の源となり、さらに一粒はその街を吹き抜ける風にやさしさを願う声となり……最後の一粒は、彼女の焦がれた男の懐に眠る小さな石となった。

けれどその石を男――トリノアークは見ることができず、だからずっと、懐にしま

われつづけ、彼を守りつづけることとなった。

いまは昔の物語である……。

あとがき

最初にお詫びいたします。

看板に偽りあり――ではありませんが、本書は予告されたものと内容が大きく異なっております。

「其は水に遊ぶ者」の続きを期待して待っていてくださった方々には、本当に申し訳ありませんが、今回の再起は、番外編のみ、ヒロイン不在の本となってしまいました。

さらに言えば、諸事情により書き下ろしもなしという……ううぅ、本当にお詫びの言葉もありません（泣）。

こんにちは、前田珠子です。

現在眼鏡を破損したせいで、実に二十年ぶりという、はらはらどきどきの裸眼生活を送っております。

どこがはらはらどきどきなのかと言いますと、初めて眼鏡を作って以来、入浴時と就眠時以外、裸眼で過ごしたことがなくなって久しいためなんですねー。

もはや裸眼視力もわからないわたしの裸眼視界はソフトならぬハードフォーカスの世界……なにしろテキ（？）は近視と乱視のあわせ技を使ってくるもので、室内はともかく、外出となるとかなりスリリングです。暗くなったら、とても外には出かけられません。

実はこのあとがきも、画面の約十五センチ前に顔を突き出すという、かなり不自然な格好で書いてます。いえ、ワープロソフトって、ときどき思いもかけない変換とかしてくれちゃいますし……不完全ながらブラインドタッチ覚えといてよかったなーと、しみじみ思ってたりします、いやほんと。

早く眼鏡を新調しなくては……。しかし、この不自由さはウン年前、情けなくも逆さまつげで眼球傷つけて眼帯生活を送ったとき以来です。あのときは遠近感が狂って

苦労させられたものですが、今回のハードフォーカスの世界もなかなか……。

目に良いとされるブルーベリーエキス、ちゃんととってるんですけどねぇ。それともこれまで蓄積された眼精疲労度が高すぎて、視力回復まで追いつかない……とか？

……まあ、せめて裸眼でも外が怖くなくなる程度には、視力回復のための努力をしようと心に決めた前田でした。取り敢えずは、遠くの緑を見る、かな……？

しかし、作品説明もそっちのけで、なにを書いているんでしょう、わたしときたら。

さて、作品説明、行きます。

「揺籃の瞳」

雑誌のＣｏｂａｌｔに、三回に渡って掲載していただきました中編です。伏線張って名前変えたりいろいろしたんですが、どうも早々にあのひとやらこのひとやらの正体がばれまくりー、という（いただいたお手紙でね）、我が身の修行不足を痛感させられた話でありました。

時代的には、本編の始まるずーっと以前のお話です。時を止めたお師匠さまズに

は、その特技（？）を生かして、いろんな場所のいろんな時代を渡り歩いて（別に時を駆けたりはしませんが）いただきたいと思っております。

ラストに関しては、是非が分かれましたが、あれはあれでよかったのではないかとわたしは思っています。

紫蘭と翼飛の状況次第では、エーメンティーニとイイオーンも、還俗して生き返るかもしれないし……そんなことになったら、珊瑚コンビとか鋼玉コンビとかが、嬉々として手伝い申し出そうだなぁ……一応人間のはずだし、世界安定のために働く聖なる「使徒さま」のはずなのに——いや、作品世界が壊れるようなことは書くまい。

南無。

でもって（ちょっと冷や汗もの？）もうひとつの掲載作。

「晴嵐姫」

書き慣れない短めの枚数で——とのことで、ふたつあらすじを提出したうちのひとつ。

痛感しました。

このコンビ、引き離すと、それぞれなにしでかすかわからなくデンジャラス。かといって一緒にしとくとどこまでもエンドレスに掛け合い漫才を展開。ほどよく一緒でほどよく離してというのが理想か。

うーん？（微妙）

そろそろ結びと行きましょう。

担当の永田さま。

今回も著しいご迷惑をおかけし、申し訳ありませんでした。次回こそはこのようなことのないよう、しっかり精進させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

山本鳥尾さま。

いつも無理なスケジュールで申し訳ありません。精進いたしますので、どうかこれからもよろしくお願いいたします。

そして、読んでくださる方々。

面白くてどきどきわくわくする世界が理想で、夢です。

そんな世界を書き続けていきますので、どうかおつきあいください。
それでは――。

平成十六年　某月　某日

前田　珠子

《初出一覧》

「揺籃の瞳」……Ｃｏｂａｌｔ’03年８月号～12月号
「晴嵐姫」……Ｃｏｂａｌｔ’04年８月号

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、最近では実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



聖石の使徒
揺籃(ようらん)の瞳

COBALT-SERIES

2004年8月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　谷山尚義
発行所　株式会社 集英社

〒101−8050
東京都千代田区一ツ橋2−5−10
(3230)6268(編集)
電話　東京(3230)6393(販売)
(3230)6080(制作)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2004　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN4-08-600458-5 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒

其は焔をまとう者

聖石の使徒

其は力を放つ者

聖石の使徒

其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒

其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ



〈好評発売中〉 コバルト文庫

不幸の中にも必ず幸せはある!?
本好き少女の痛快ファンタジー!

天を支える者 1~2

前田珠子
イラスト／明咲トウル



無類の本好きである少女ナルレイシアは「不幸中の幸いの権化」の異名を持つトラブルメイカー。ひょんなことから次の柱神を見きわめる〝選定者〟に選ばれてしまうが…!?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廈門 潤



漆黒の魔性

白焔の罠

柘榴の影

紫紺の糸（前編）（後編）

翡翠の夢1～5

鬱金の暁闇1～3

女妖の街 破妖の剣 外伝①

ささやきの行方 破妖の剣 外伝②

忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③

時の螺旋 破妖の剣 外伝④

魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤

呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

コミック版 好評発売中

破妖刀・紅蓮姫を操る剣士ラスの
愛と闘い…大人気ファンタジー！

前田珠子/厦門 潤

破妖の剣

魔性降臨

白い焔に包まれて消えた街——その原因を探るラスと少年ザハトだったが!?



破妖の剣

紅の魔剣 碧の魔胎

最愛の使い手を失い暴走する紅蓮姫…。ラスと出逢う前の紅蓮姫の哀しい物語。



破妖の剣

深紫絃韻 1 2

魅縛師リーヴィの里帰りに同行したラスは、思いがけないピンチにおちいるが…!?



〈好評発売中〉 コバルト文庫

とびきり有能な人材、提供しますー。

イズァーカ商会へようこそ

前田珠子
イラスト／鈴木理華



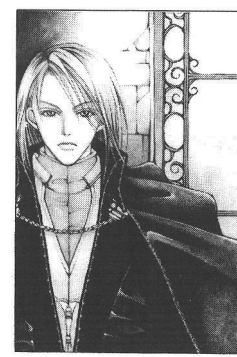
イズァーカ商会はどんな厄介事も引き受ける、世界最大にして唯一の人材派遣会社。特殊護衛課のカリンたちのもとには今日も物騒な依頼が舞い込んできて!?トラブルコメディ！

〈好評発売中〉 コバルト文庫

約束の庭でほほえむ、美しい妖魔。
華麗なる王国の幻想ファンタジー！

タラスタロスの庭

前田珠子
イラスト／木々



狂王カァスタイーンは残虐な殺戮の末、遂に広大な国タラスタロスを平定した。だがその裏には、選ばれし者にしか見えない、空中に浮遊する庭で会った妖魔との約束があった…。

〈好評発売中〉 コバルト文庫

新宿に吸血鬼出現？私が巫女体質？
ファンタジック学園コメディ！

女神さまのお気の向くまま1〜3

前田珠子
イラスト／辻 よしみ



異界から侵入してくる怪物から「こちら側」の世界を守っているふたりの女神さま。そのひとり・嫦娥の依巫となってしまった高校生・桜子は超多忙、大迷惑な毎日を過ごしていて!?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

美しく切ない叙情ファンタジー

前田珠子 〈月下廃園〉シリーズ

イラスト／江ノ本瞳

月下廃園

月華の国の王子で、風の愛し児トゥミャーンは、王宮の庭園で出会った美しい人物が忘れられず…。

月下廃園2

ある想いから、自らを月華の王宮の庭園に呪縛しているセジュン。そんな彼を慕うトゥミャーンだが。

月下廃園3

トゥミャーンは光明神殿の使者として、セジュンが消えた月華に3年ぶりに戻ったが!?



〈好評発売中〉 コバルト文庫

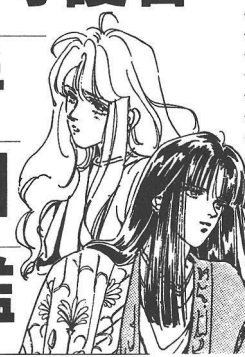
目覚めよ、永遠楽土を守る聖獣たち！

前田珠子 〈聖獣〉シリーズ

イラスト／おおや和美

まどろみの守護者
聖獣復活譚 前

銀の守り手
聖獣復活譚 後



目覚める日
聖獣覚醒秘譚　第一部

深き闇の檻
聖獣覚醒秘譚　第二部

昏き夜の果て(上)(中)
聖獣覚醒秘譚　第三部

〈好評発売中〉 コバルト文庫

超豪華！ メモリアルブック!!

マリア様がみてる
プレミアムブック

今野緒雪／ひびき玲音
with 山百合会



TVアニメ1stシーズンの設定画を一挙公開！ 書き下ろしの番外編やひびき玲音のコミックなど、シリーズの魅力がてんこ盛り!!

〈マリア様がみてる〉シリーズ・好評既刊

マリア様がみてる
黄薔薇革命
いばらの森
ロサ・カニーナ
ヴァレンティーヌスの贈り物〈前編〉〈後編〉
いとしき歳月〈前編〉〈後編〉
チェリーブロッサム
レイニーブルー
パラソルをさして
子羊たちの休暇
真夏のページ
涼風さつさつ
レディ、GO！
バラエティギフト
チャオ ソレッラ!

〈好評発売中〉 コバルト文庫

〝しるし〟は吹雪の果てに――。

緑のアルダ
蒼い雪原

榎木洋子
イラスト／唯月　一



アナンシア王女と旅に出たアルダ・ココたちは伯爵邸に宿をとることに。主は娘を一行の騎士の誰かと結婚させようと躍起になるが!?

緑のアルダ シリーズ・好評既刊

石占の娘
荒れ野の星
千年の隠者
謀略の都
虹の白夜
旅立ちの丘

〈好評発売中〉 コバルト文庫

今一緒にいたら、ダメになる——。

姫神さまに願いを

～藍ちぎる瑠璃～

藤原眞莉
イラスト／鳴海ゆき



カイを従弟と勘違いした足利義昭と一緒に京へ行くことになったテンとカイ。ところがルイスをめぐってケンカした二人は決別して!?

〈姫神さまに願いを〉シリーズ・好評既刊

姫神さまに願いを
～享楽の宴～
～浪の下の都～
～永遠国ゆく日～
～鏡語りの森～
～夢路の剣～
～巡恋夏城～
～血誓の毒～
～月の碧き燿夜～前・後編
～秘恋夏峡～
～殉血の枷～
～遠国散る恋華～前・後編
～荊いだく蝶～
～空参鳥の幻～
～空葬の瞳～
～雪去りの紅～

〈好評発売中〉 コバルト文庫

私は、操り人形なんかじゃない！

流血女神伝

暗き神の鎖（中編）

須賀しのぶ
イラスト／船戸明里



王子を出産し総督としても人々の羨望を集めるカリエだが、胸中では恐怖を抱えていた。親衛隊長エディアルドはその正体を知るが!?

〈流血女神伝〉シリーズ・好評既刊

帝国の娘（前編）（後編）　暗き神の鎖（前編）
砂の覇王 1〜9
女神の花嫁（前編）（中編）（後編）

〈好評発売中〉 コバルト文庫

十九郎に迫るタイムリミット!?

ハイスクール・オーラバスター

オメガの空葬

若木未生

イラスト／高河ゆん



修学旅行に出かけた亮介たち。そんな中、諒の隣にいたはずの同級生が姿を消した。一方、東京にいる十九郎は一人で妖者と対面する!?

-〈ハイスクール・オーラバスター〉シリーズ・好評既刊-

ハイスクール・オーラバスター ヘヴンズ・クライン

ハイスクール・オーラバスター ミレニアムBOOK NEO

ハイスクール・オーラバスター 不滅の王

ハイスクール・オーラバスター 永遠の娘

他18冊好評発売中

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上(および12月刊の文庫のチラシ誌上)。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10(株)集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」(大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円)の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上(および8月刊の文庫のチラシ誌上)。大賞入選作はコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10(株)集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt(1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売)をごらんください。

9784086004589

ISBN4-08-600458-5

C0193 ¥419E

1920193004199

定価本体419円十税



コバルト文庫